

2021（令和3）年度 自己点検・評価報告書

神戸海星女子学院大学
2022(令和4)年7月

2021（令和3）年度 自己点検・評価報告書

目 次

I	自己点検・評価（目標）	1
II	大学・学部等の現状とその評価	
1	自己点検・評価委員会	7
2	教務委員会	9
3	F D・S D委員会	11
4	国際交流委員会	13
5	学生委員会	16
6	キャリア委員会	20
7	相談委員会	25
8	入試委員会	30
9	宗教委員会	35
10	図書委員会	40
11	生涯教育委員会・地域交流委員会	44
12	英語観光学科	46
13	心理こども学科	50

I　自己点検・評価（目標）

2021(令和3)年度 自己点検・評価（目標）

委員会・学科	基準	2021目標
1 自己点検・評価委員会	2-⑤	<p>内部質保証システムの適切性について定期的に点検・評価を行い、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行う。具体的な取り組みとして、次の事項を行う。</p> <p>①各学科及び各委員会が設定した目標が基準全体を網羅しているかを確認し、網羅されていない場合は、調整を図り、学科・委員会レベルでは自己点検・評価を行うことが難しい項目については、大学改革運営会議に自己点検・評価を行うよう提言する。</p> <p>②外部評価委員会規程がないため、規程の原案を策定する。</p> <p>③大学改革運営会議と自己点検・評価委員会の役割を明確にしたうえで、「内部質保証に関する方針」の内容を見直し、必要に応じて方針の改定案を作成するとともに、その改定案に基づき「内部質保証規程」の内容を見直し、規程の改定案を作成する。</p> <p>④「内部質保証規程」の別表1「内部質保証の仕組み」の内容について、現状を反映させるため、且つ内部質保証システムの適切性、有効性の向上を図るために、改定案を策定する。</p> <p>⑤各学科及び各委員会から提出された自己点検・評価報告書をもとに、全学的な改善・向上に向けた方策を立てる。</p>
2 教務委員会	4-⑥	教務関係の成果を可視化し、公表していく。特に「卒業アンケート」については、回収率を上げることで、より正確な全体傾向を分析し、公表する。学生への理解を深めるために、定期の個別懇談だけではなく、随時懇談を設ける。IR室との連携により、さらに公表すべき情報について検討し、公表の準備をする。
3 FD・SD委員会	6-④ 10-⑤	教職員の資質向上に向け、組織的な研修や実態調査を行うとともに、それらを検証し、改善を図る。さらに、実施した研修については、アンケートを実施して結果を共有する。また、必要事項については、関係部署との連携を深める。
4 國際交流委員会	4-④ 7-②	コロナ禍で海外留学が実施できない状況下においてもオンライン留学プログラムを更に充実させ、国際交流プログラムを通じて、学生が異文化を理解し、グローバルな視点で考え発信する力を、協定校等のオンライン交流会などをはじめとした場で養成していく。
5 学生委員会	6-④ 7-② 10-⑤	学生支援室Stellaの充実を図るとともに、組織としてのサポート体制を整備する。 ①学生アンケート一斉調査を実施 ②FD・SD研修会の開催
6 キャリア委員会	6-④ 7-② 10-⑤	低年次からのキャリア教育を促進させ、主体的に行動し自ら進路を選択できるようにキャリア支援プログラム及び体制を充実させる。 ①低年次から参加できるキャリアイベント、機会の創出と提供 ②個人面談利用者数の向上 ③キャリアサポート一制度の導入
相談委員会	7-②	学内の相談体制を整える。
7 H相談委員会	6-④ 7-② 10-⑤	学生と教職員を対象にハラスメント防止啓発活動を行う。ハラスメントについての理解を深め、身近な事例をもとに、対応方法や相談機関について知り、ハラスメント防止への意識を高める。
8 入試委員会	5-③	2022(令和4)年度入試において、両学科で入学定員を確保する。
9 宗教委員会	1-① 1-②	キリスト教的価値観に学生が触れる機会を安全に提供できるよう創意工夫する。
10 図書委員会	8-③	① 感染予防対策のもと、図書・資料の利用環境を整備する。 ②「図書ラインナップサービス」の取組みを通じて学生の学修をサポートする。
11 生涯教育委員会 地域交流委員会	9-③	社会連携・社会貢献の適切性について定期的に点検・評価を行い、その結果をもとに改善・向上を行う。
12 英語観光学科	4-④	コロナ禍においてオンラインを活用した授業の質を高め、フィールドワークやゼミを通じて課題解決能力を修得させる機会を設ける。また英語のカリキュラムを強化し、TOEICの必要性を周知すると共に英語で発表できる機会を設ける。
13 心理こども学科	4-④	学生の学修を活性化し、主体的の参加を促す授業内容や授業方法を工夫する。授業アンケートや学修の振り返り等を通して学生の実態をとらえ、改善を図る。

II 大学・学部等の現状とその評価

1. 自己点検・評価委員会

P【目標】基準2-⑤

内部質保証システムの適切性について定期的に点検・評価を行う。

D【現状説明】

2021年度の自己点検・評価報告書については、以下のように進めた。

6月25日までに各委員会の目標を提出し、7月の会議で検討、決定した。10月6日、11月10日、12月1日、年明けの1月12日、2月2日に自己点検・評価委員会を開催し、途中経過を報告した。

2月25日を、入試委員会と自己点検・評価委員会を除く各委員会の報告書提出締め切りとし、3月2日の委員会、さらに4日の大学改革運営会議でこれを検討、承認されたものを7日に外部評価委員会委員宛に送付した。3月16日に外部評価委員会を開催、各委員会から報告を行い、意見を拝聴した。

4月6日の委員会で入試委員会の報告書が提出・報告された。5月初めに自己点検・評価委員会の報告書が提出された。

これからの予定

6月3日を完成した報告書の提出期限とし、6月8日に委員会を開催し、報告書を確認したうえで、学長に提出する。

6月29日に教授会終了後、FD・SD研修会で報告書全体を全教員に説明する。

7月31日にホームページにて報告書を公開する。

C【点検・評価】

2021年度の自己点検・評価活動は引き続き、「建学の精神・教育理念・目的及びディプロマポリシーに基づく、学修成果の可視化」という統一テーマを掲げて目標を設定し、点検・評価を行ったが、新型コロナウイルス感染拡大の状況が続き、多くの委員会・学科でその対策に追われた。

国際交流委員会では海外留学プログラムが実施できなかつたが、オンラインでの留学プログラムを充実させ、学生が異文化理解やグローバルな視点で考え、自分の意見を発信していく力をつけさせようとした。

図書委員会では感染拡大の中で学生が図書館に入りにくい状況があつたが、感染予防対策を徹底するとともに、「図書ラインナップサービス」を充実させることによって、図書館での滞在期間を短縮しながら、必要な文献が学生の手に入るような取り組みを拡大し、学生の学修サポートを行つた。

英語観光学科では、対面授業がとくに春学期で難しい中で、フィールドワークを継続し、どのように学習効果を保っていくかが課題となつていた。神河町の「誘客・周遊の中核となる観光地独自の魅力づくり支援事業」や、各地でのフィールドワークに参加したり、「第11回 KAISEI English and Tourism Festival」を開催、3チームの作品を「関空発学生がつくる海外旅行企画コンテスト」(観光庁後援)に応募するなどの活動を継続することができた。

新型コロナウイルス感染拡大という異常な環境の中で、これまで積み上げてきたものをさらに先に進めることは難しかつた。しかしその中にあって、オンライン活用のノウハウを得たことは大きな収穫

であった。望ましいことではないが、今後、このような状況が再び起こったとき、これを活用することで教育の継続性を維持できるからである。

今年だけの状況と考えるのではなく、今後も同じようなことが起こった時の対応策として、しっかりと検証し、ノウハウとして保っていかなければならない。

A【改善策】

コロナ禍の状況は現在は少しずつではあるが、収束しつつある。まだ予断は許さないが、本年度はコロナ収束を前提に考えてもよいのではないだろうか。

昨年度はコロナ対策に追われざるを得なかった。大学に登校させられないという状況の中で、どのように学修やその他の指導を継続させるかは教育機関にとって重大な問題であった。そのような異常事態における様々な方策が学習できたのは大きな収穫であった。

本年度は、コロナ対応は一区切りついたので、大学の将来像を再確認するため、中期計画の進捗状況を各部署で検証するということで自己点検・評価活動を行いたいと考える。

入試委員会と自己点検・評価委員会の報告書が年度を超てしまうことはやむを得ないことである。従って毎年外部評価委員会は両委員会の報告書が未提出のままで開催されることになる。次年度の 6 月あたりに開催してはという案もあるが、それでは大学側も担当者が代わる可能性があり、外部評価委員にも年度替わりの異動の可能性もあり外部評価委員の依頼が委員会開催の直前になるという問題が発生する。あちらを立てればこちらが立たないという状態である。これについては年内に一区切りつけるという現在のやり方でやむを得ないのではないかと考える。

2. 教務委員会

P【目標】基準 4-⑥

2021 年度の目標

基準 4-⑥教務関係の成果を可視化し、公表していく。特に「卒業アンケート」については、回収率を上げることで、より正確な全体傾向を分析し、公表する。学生への理解を深めるために、定期の学生面接だけではなく、随時懇談を設ける。IR 室との連携により、さらに公表すべき情報について検討し、公表の準備をする。

D【現状説明】

今年度ホームページに掲載した教務関連情報は以下である。

- ①2020 年度 春学期 授業改善に関する調査結果報告
- ②2020 年度 全学年 G.P.A.分布
- ③2020 年度 卒業生アンケート集計結果

C【点検・評価】

2020 年度の卒業生対象に実施した「卒業生アンケート」から学修成果を分析した。
前年度は回収率がコロナ禍の影響で 36.8%と低かった。2020 年度は、アンケート実施日を調整した結果、回収率が 96%となり、かなり正確な実態が把握された。4 件法で調査したので比較的傾向が、実施者にとっても把握しやすかった。ただし、コロナ禍でのオンライン、対面授業混在で、経年比較による考察は割愛する。

卒業アンケート結果(教学関連抜粋)単位は%、数字は「満足」+「ほぼ満足」

アンケート項目抜粋	英語観光学科	心理こども学科	全体
連絡掲示は適切だったか	90.0	84.7	87.3
教務・学生課での相談	95.6	84.3	89.9
ゼミで課題発見力等が身についたか	95.6	100	97.8
図書館での蔵書の満足度	86.9	85.7	86.3
授業評価は素直に評価したか	100	100	100

以上が教務関連「教学」「ゼミ」「図書館」「授業評価」である。回収率が 90%を越えていること、満足度が高いことから、オンライン、対面の相互授業で学生にとっては、戸惑いがあると予想したが、概ね良好と言える。

次に②G.P.A.の分布について、1 年生で 1.0 未満の学生が 11 人(10.7%)、3.0 以上が 24 人(23.5%)と二極化が目立つ傾向にある。1、2 年での学修支援の強化が課題と考える。

2020 年度 学年別 G.P.A. 値の分布

	1 年	2 年	3 年	4 年	総計
3.0 以上	24	22	16	30	92
2.0 以上 3.0 未満	51	43	48	42	184
1.0 以上 2.0 未満	16	30	20	11	77
1.0 未満	11	7	1	3	22
総計	102	102	85	86	375

①についてはFD・SD委員会の報告と重複するので割愛する。

A【改善策】

今年度より、3回の欠席かつ5科目以上欠席の学生については、担任との面談により学生課もしくは教務課に報告するようにした。その結果、早期に学修支援が必要な学生に学修支援や学生相談を提供しやすくなったことは、一つの成果と言える。延いては現状②の成績の二極化への対応策にもなりえる。

コロナ禍第6波では秋学期の後半、特にテスト期間直前にオンラインへの切り替えを行った。賛否両論ではあったが、本試験に濃厚接触者、陽性者が来られなかつたら、混乱することと判断したからである。まだまだ、コロナ関連に対しては急な対応をせざるを得ないことも出てくると考えられるが、教職員が一丸となって対応できたことは大きな成果と言える。

次年度は、CAP制に準じた履修登録をより進めていく。今まで、取り残した単位を3年、4年で取得したり、資格取得のために、かなり過重負担な履修登録を出したりする学生も認めてきたが、4年間を通して無理のない単位取得ができるよう更に指導することは課題と言える。

また今後は、IR室との連携により、さらに公表すべき情報やその分析について検討していく。さらに、学生一人ひとりの学修成果と修学における様々な悩みなどを、年度が変わっても容易に振り返り、把握することができるような環境を整備すべく、2022年度目標で計画をしていく。

今年度の目標に挙げたアンケートの回収率アップについては、概ね達成された。IR室との連携に関しては、教務課で実施した考察を含めたアンケートを、新設の教職員共通フォルダに保存し、次年度以降につなぐことも実践しようと考えている。

3. FD・SD委員会

P【目標】基準FD6-④ SD10-⑤

基準6-④ 10-⑤

教職員の資質向上に向け、組織的な研修や実態調査を行うとともに、それらを検証し、改善を図る。また、実施した研修については、アンケートを実施して結果を共有する。さらに必要事項については、関係部署との連携を深める。

D【現状説明】

今年度も、コロナ禍で活動がかなり制限されたが、目標の具現化を進めるために、以下の項目を実施した。

○春学期…非常勤との面談

授業出席調査

授業結果・授業改善

研修⇒合理的配慮に係る研修(教務課、学生課共同)

○秋学期…(進行中も含む)

授業出席調査⇒WEB出席登録の入力に切り替えた

授業結果・授業改善

授業公開

授業評価

C【点検・評価】

すでに既述したコロナ禍での制限下実施となり、目標達成には至っていない。しかし、以下にあげた非常勤との面談については有益な情報が得られた。

<抜粋>

1. 学生の授業態度について

- 1)授業の反応は悪くはないが、試験での長文回答を放棄する学生が複数見られた。試験の重要さを分かっていない学生が一定数いるように感じる。
- 2)やる気がないわけではないが、実際が伴わない。欠席も多い。
- 3)目的意識とレベルの差が大きい。
- 4)オンライン授業期間中に自発的参加を促しても、必要最小限のことしかしない学生が多いと感じた。
- 5)授業を投げ出す、もしくは授業できるレベルに達していなかった。
- 6)後半から欠席者が増えたのが気になるが、コロナ禍によるオンライン化とそれに伴う横のつながりの希薄化、外出もままならない社会状況等の影響があるようと思われる。
- 7)オンラインで顔を見せない。名前を呼べば返事はあるが、質問等がない。課題の提出が遅れ気味であった。

- 8)途中でオンライン授業になり、学生の反応が鈍くなった。
- 9)テキストがあまりに難しすぎて戦意喪失状態学生がいた。
- 10)英語動詞の基本形に対する理解ができていない学生が心配である。

2. 授業運営の課題

- 1)英語力が低い学生は授業に取り組んでいてもついていけない部分があるが、教職必修である以上ある程度のレベルを保たなければならないので、その部分の調整が難しい。
- 2)語学の授業で25人となると、15回の授業で一人一人に向かい到達目標に照らして正しい反応を引き出すには人数が多いと思う。
- 3)オンライン授業(Google Classroom)での対応について、多人数では個々の学生の状況がつかめず対応が困難なように思う。今後どのような工夫が必要か研究する必要がある。
- 4)再履修者でピアノの苦手な学生のモチベーションの維持が難しい。
- 5)オンライン参加の取り決め(顔を表示するなど)が必要。
- 6)オンライン授業では、学生の様子がわからない。
- 7)実際の体育授業の参観ができなくなってきた。可能なら、海星の小学部で授業参観が、出来たらありがたい。
- 8)学生はオンラインのためか、調べ学習が不十分であった。課題の与え方を考えたい。
- 9)学生との意思疎通が一層図れるように更に工夫したい。
- 10)「とにかく出席していればそれでいい」と思っている一部学生の意識を変えたい
以上から見えてくる学生の現状として、「指示待ち」「二極化」が一要因としてあげられる。

A【改善策】

今年度多くのことが臨機応変かつ試行錯誤で実施せざるをえない状況であった。しかし、オンラインにおける学生との双方向コミュニケーションが、オンラインだからこそ活用しやすかったという意見もあった。

本学は、教職課程、留学前後実習等の特色から、これからも、できる限り対面授業を大切にしていく方針は変わらない。学生に寄り添い、学修目標到達をめざす。

その一つの方策として、SD・FD研修会の在り方も一考を要する。本学は数年前より全員参加型の研修となった。今まででは、各委員会のメンバーが少人数で、必要と思われる研修を行ってきたが、予想外のコロナ禍、あるいは少子化が急激に進む中、限られた予算で教職員が喫緊に必要と感じている研修を優先的に実施することも必要だと考える。次年度は、委員会だけではなく全教職員から研修について意見聴取を参考にし、本学全体を見通して、研修実施を進めていきたい。本学は多くの非常勤講師の先生方に協力いただいている。そこで、合理的配慮やハラスメント関連について、教員説明会等で更なる理解を深めていただくことも課題の一つに挙げたい。

4. 国際交流委員会

P【目標】基準 4-④

コロナ禍で海外留学が実施できない状況下においてもオンライン留学プログラムを更に充実させ、国際交流プログラムを通じて、学生が異文化を理解し、グローバルな視点で考え発信する力を、協定校等のオンライン交流会などをはじめとした場で養成していく。

D【現状説明】

本年度は昨年度に引き続き新型コロナウイルス感染症の影響ですべての海外留学プログラムは中止となった。そのため下記①～②のオンラインプログラムを実施した。

①サイモン・フレイザー大学(カナダ)の語学プログラムの実施

期間:2021年8月4日～8月28日 4週間

参加者:2名

単位認定:有、留学支援金:10万円支給

②サンフランシスコ州立大学(アメリカ)の語学プログラムの実施

期間:2021年8月10日～8月27日 3週間

参加者:1名

単位認定:有、留学支援金:10万円支給

③サンフランシスコ州立大学(アメリカ)の語学プログラムの実施

期間:2022年2月22日～3月11日 3週間

参加者:なし

語学留学プログラムは日本時間(アジア地域時間)に合わせて実施しているオンラインプログラムを提供した。サンフランシスコ大学でのプログラムは様々なテーマに関してのディスカッションやプレゼンテーション中心の授業内容であった。クラスの国籍は日本人と韓国人が半数であった。またサイモン・フレイサー大学ではリーディング、リスニング、コンポジション、オーラルスキルなど英語力を付ける内容となっており、併せてカナダの文化についても学ぶ機会があった。

また両プログラムに参加した学生には「第11回 KAISEI English and Tourism Festival」において体験発表を行った。

C【点検・評価】

本年度も新型コロナウイルス感染症の影響により、オンラインでのプログラムを実施したが、オンライン語学留学の希望者が少なかった。要因としては英語力の修得においてはオンラインでも学

習効果は十分得られるが、海外渡航による留学によるリアルな異文化体験を行うことはできない。しかし留学体験前の準備としてオンラインプログラムは十分に学修効果を得られると考えられる。学生への募集に際しては渡航制限中でオンラインとリアル留学とのハイブリット型留学を経験することはできなかったが、今後留学での渡航が可能になればオンラインを活用した留学プログラムの質の向上が図れると思われる。

①サイモン・フレーザー大学(カナダ)のオンライン留学について

カナダのサイモン・フレーザー大学のオンライン留学に参加した学生のアンケートからは満足度が高い評価であった。1クラス 10 名程度で発言しやすい環境であった。授業時間は日本時間で 9:00～15:00(火～金)、9:00～12:00(土曜日)で合計 48 時間の授業時間であった。プログラム内容は英語授業としてリーディング、リスニング、コンポジション、オーラルスキルに加え、カナダ文化の講義であるカナディアン・スタディと選択科目を取得することができる。参加学生が選択した科目は、ニュース・メディア、フィルム・スタディ、ビジネス・コミュニケーションズ、リタレチャーであった。通常の英語授業に加え、幅広く異文化理解や新たな知識を得ることができた。学生の感想からも双方向のオンライン授業が提供され、学生間の発言機会も十分に確保されていた。

2 名の学生の出席率は 1 名が 100%、もう 1 名が 98.15%(1 日のみ欠席)と非常に良く 1 日 6 時間と長時間であったが学生達の授業評価は高いものであった。

参加学生は日本人が多く、国籍バランスは必ずしも良くはないが、学生からは異文化体験ができたとの評価であった。本学におけるオンライン授業の参考になると思われる。

②サンフランシスコ州立大学(アメリカ)のオンライン留学について

サンフランシスコ州立大学のオンライン留学に参加した学生のアンケートからは満足度の高い評価であった。このプログラムは通常の英語プログラムではなく、週 1 回実施される現地大学の講義や 1 日 30 分以上現地学生とテーマに基づいたディスカッションなどの授業が行われ、コミュニケーションスキルを養う機会が提供された。

参加人数は 30 名程度で日本人が 50%、韓国人が 50% であった。一定以上の英語力が必要と思われるプログラムであるが、他国的学生との交流機会も多く、学生にとっては有意義なものであった。参加学生の TOEIC スコアはオンライン留学前が 650 点で、終了後のスコアが 675 点と 25 点上がっており、特にリスニング力が向上していた。

今後も英語プログラムだけでなく現地の学生との交流ができるプログラムを学生に提供ていきたい。

両プログラムに参加した学生による報告会は在校生へオンラインプログラムについての理解を深めることができた。

A【改善策】

本年度実施した2つのオンライン留学プログラムに関して問題の改善を行う。

まずオンライン留学プログラムの参加者が少ない状況を改善する必要がある。募集説明会に体験者の意見も伝え、具体的なプログラムのイメージを理解させるなどの工夫が必要である。

オンライン留学は費用面で通常の留学と比較して1/3～1/4程度に抑えられることがメリットであり、海外留学プログラムに経済的に参加が困難な学生に対しても海外の学生との交流が図られ、英語力を修得する機会を提供することができる。

ただコロナでの渡航制限が緩和され、海外渡航が可能になるとオンラインではなくリアルな留学を希望する学生は増えると予測される。その際にも留学前の準備としてオンライン留学を活用することで、海外での留学プログラムをより充実させることができると考える。

2022年度4月より中・長期留学を再開した。留学募集説明会には、40名を超える希望者が参加しており、海外渡航を希望する学生の多さを改めて認識した。新型コロナの影響がだいぶ収まったとはいえ、まだ日本入国に関してさまざまな制約が残るなか、2022年度はカナダ・オカナガン・カレッジに4名の留学生を派遣することとなった。本学の留学制度を再度軌道に乗せる第1歩となると考える。

今後、渡航先及び帰国での入国制限が緩和されれば、多くの学生に海外での留学経験を体験させ、異文化理解や英語力向上、そしてグローバルな視点で物事を考える力を修得させたいと考える。

5. 学生委員会

P【目標】基準6-④、7-②、10-⑤

学修支援室 Stella の充実を図るとともに、組織としてのサポート体制を整備する。

そのために①学生アンケートの一斉調査を実施し、②FD・SD 研修会の開催をする。

D【現状説明】

サポート体制は、2020 年度末に、大きく革新した。まず 1 点目は、「サポート会議」の発足である。学生が平等に教育の機会を確保するために、学生部・教務部・保健室・学生相談室がチームで支援体制を構築し、支援を実施する。すなわち、4 つの部署の連携による「サポート会議」という新しい組織の始動である。サポート会議は、必要に応じ適時開催し、学内の支援の仕組みについて考察する。また、学生の情報を共有し、部署や支援に当たる教職員が共通意識を持ち、学生に対して平等な支援を提供できるよう画策する会議である。そして 2 点目は、「サポートルーム・ステラ」の整備である。「サポートルーム・ステラ」は、2018 年に心理学教員及び養護教諭が支援ルームとして開設したが、本学の特色ある支援室としてさらに充実させるために、2021 年度から学生委員会で事業企画を策定し、学生課が運営することになった。それまで、総合的にさまざまな支援を施したサポートルーム・ステラであるが、支援室の機能を明確にするため、名称を「学修支援室 Stella」(合わせて、学生相談室は「学生相談室 Maris」)に改名した。さらに、2018 年から実施している学生による学修支援制度(ピアサポート)は、「学修支援室 Stella」の一環で行うこととして、再整備した。

4 月 3 日の教員懇談会において、新しいサポート体制について、専任教員並びに当日出席した非常勤講師に共通理解を図った。示した内容は、サポート会議の発足、学修支援室 Stella の役割、そして今期から新しく導入する学生面談記録の活用についてである。科目担当教員は、授業を 3 回欠席した学生名を「3 回欠席学生報告カード」により教務課に知らせ、そのカードが 5 科目分集積すると、担任に「学生面談記録」が渡され、担任は該当学生と面談を行う。面談後、担任は結果を「学生面談記録」に記入し、学生課に提出する。そして後日、サポート会議において「学生面談記録」を基に、その学生に対する支援の内容について検討をするという流れである。

学生面談記録は、春学期だけで 11 枚の提出があった。支援体制や学生一人ひとりの支援内容の検討等膨大な議事が発生し、サポート会議の開催調整が非常に困難になった。そこで、秋学期からサポート会議は「学生サポート委員会」として展開し、不足分をさらに不定期的に開催することになった。したがって、これ以降の現状は、学生委員会としてではなく、学生サポート委員会の領域となる。しかしながら、本年は学生サポート委員会としての自己点検は行われないため、ここに簡単に記録することにする。

まず、学生面談記録は、活用した教員の意見を反映させ、新しい書式に作り替えた。また、サポートのフローも学生サポート委員会を中心に作成し直し、10 月の教授会で提示した。月 1 回定期的に開催する学生サポート委員会では、学生の情報共有やサポート体制の整備について話し合

った。12月には、HPに「障がい等のある学生への学修支援に関する基本方針」を掲げ、本学の支援の基本姿勢、支援体制、支援の申し出の方法を示した。後に、書面は申請方法をわかりやすく提示するために、新入生用と在学生用それぞれに分けて示した。なお、秋学期は、10枚の学生面談記録の提出があった。しかし、学生への支援の実施については、困難を極めた。コロナの影響を受けて心身共に疲弊しオンラインで受講している学生、濃厚接触者やワクチン接種による特例欠席、本来なら欠席扱いになっていた怪我・疾病による申請等、障がいのある学生への配慮と混在し、多くの配慮事項が発生したためである。学生サポート委員会内では、支援に対する見解の相違もあり課題は多いが、全ての教員や対象学生が納得できる支援体制を提示できるよう、熱心に意見交換を続けている。

さて、目標①の学生生活アンケートの一斉調査については、2021年7月と2022年2月の2回実施した。質問項目は、新型コロナウイルスの影響による生活環境・心身の健康の変化、学修支援室 Stella の利用についてである。そして2月には新しい運営に代わった学生食堂についての項目を追加した。この学生アンケート結果も参考にしながら、学修支援室 Stella とピアサポートの2021年度の現状について振り返る。

[表1]開室日程

学修支援室 Stella(通年)		ピアサポート春学期(5月～6/18までオンライン)	
月	予約制	月	10:40～12:10
火	13:00～17:00	火	11:00～12:30
水	予約制	火	12:30～14:00
木	13:00～18:00		e-ラーニング
金	13:00～17:00		

ピアサポート秋学期		
月	13:00～14:30	e-ラーニング
火	12:30～17:50	情報関連科目

春学期は、5月連休明けから6月18日までのオンライン期間中も毎日開室した(詳細は[表1]参照)。ピアサポートもオンラインで実施した。学生への広報は、学修支援室 Stella に改名したことと、また、「ピアサポート」が学修支援室 Stella の管轄になったこと等、新しい学修支援体制を各演習で通知する他、掲示物、チラシ、ホームページ等で周知するように努めた。また秋学期には、開室時間や場所を携帯できるように小さなカードを作成し、各クラスの担任の協力を得て配布した。

[表2]2021年度の利用者延数

*:ET:英語観光学科、PC:心理こども学科

	利用者延数
ピアサポート	11名(ET11・PC0)
学修支援室 Stella	83名(ET4・PC79)

2018年にサポートルームステラが開室し、2018年度50名、2019年度59名、2020年度113名と実績は推移し、2021年度が83名であった。一方、ピアサポートは、2019年が33名という実績なので、5月～6月18日まで、授業がオンラインだったことにも関係するが、利用者は非常に少なかった。[表3]が、それぞれのルームを利用しなかった理由である。

[表3]学修支援室 Stella とピアサポートの利用状況 (n=205)

*:ET:英語観光学科、PC:心理こども学科

	学修支援室 Stella(%)	ピアサポート(%)
知らなかった	18 (ET26・PC8)	26.5 (ET35.3・PC14.3)
開室時間を知らなかった	3 (ET3・PC2)	0 (ET0・PC0)
開室時間に利用できなかった	4 (ET3・PC4)	0.5 (ET0・PC1.2)
利用することに気後れがした	4 (ET4・PC2)	6.5 (ET7.8・PC4.8)
開室場所がわからなかつた	2 (ET2・PC3)	1.0 (ET0・PC1.2)
利用する必要がなかつた	69 (ET62・PC81)	65.5 (ET56.9・PC77.4)

学修支援室 Stella を知っていますか?という設問に対して、春学期の学生生活アンケート結果《資料1》によると、「知らない」22%(ET38%・PC6%)からは幾分かは改善されているが、依然として十分認知されているとは言えない。「開室時間に利用できなかつた」「利用することに気後れがした」が少なからずあることから、次年度はこの点についても考慮したい。

他に、2021年度秋学期の学生生活アンケート結果《資料2》から、1-(1)「家庭の経済状況が変化した」と「大きく変化した」と合わせて28%、1-(4)「友達関係が変わった」「大きく変わった」が21%、1-(6)「心が沈みがちである・落ち着かないなど心の状態に変化がある」「大きくある」が24%というのが、気になる結果である。

目標②のFD・SD研修会の開催については、9月1日(水)兵庫県教育委員会事務局特別支援教育課主任指導主事の井上博之氏をお招きし、「高大連携を視点にした合理的配慮」というテーマで講演会を開催した。28名が出席し、「非常に理解できた」と「ほとんど理解できた」が100%であった。この研修会は、学生部が教務部と共に準備を進めたが、学生サポート委員会が発足したこと、研修報告は学生サポート委員会からになった。合理的配慮や合意形成についての共通理解、また本学のサポート体制を再考する非常に有意義な時間となった。《資料3》

C【点検・評価】

2018 年に開設したサポートルーム・ステラは、心理学教員と養護教員の発案と尽力により、基礎は固められていた。2021 年に学生部の管轄となり運営することで、全学的な支援室として、一步前進することができた。昨年までのサポートルーム・ステラの課題の一つが、利用者が心理こども学科に偏っていたことだ。その傾向は 2021 年も引き継がれ、学修支援室 Stella の英語観光学科の利用者は、4 名にとどまった。英語観光学科に対する広報の必要性を感じられる。心理こども学科は、教員が学修支援室 Stella の利用を強く促していることから、英語観光学科教員との連携が求められるが、教員の伝達内容と学生の理解にずれがあったかもしれないという報告を、学生委員会で受けている。いずれにしても、学修支援室 Stella の支援内容について、学生・教職員と共に理解を図る必要がある。その一方、ピアサポートは、利用者がすべて英語観光学科の学生であることも興味深い。このことから、特に学科には関係なく、利用した学生の伝聞に左右されるかとも推測できる。

最も大きな課題は、開室の時間である。特にピアサポートは、指導にあたる上級生の空きコマと、指導を受ける 1・2 年次生の空きコマの一致が難しく、いろいろと策を講じたが利用者増にはつながらなかった。

A【改善策】

2021 年度、学修支援室 Stella に新しいスタッフが加わったことも前進の一つの要因になった。このスタッフは本学の卒業生であり、心理士の資格を取得している。したがって先輩としての親しみと、教員同等の信頼性を兼ね備えたスタッフである。学生サポート委員会との協働も求められる今、次年度は学修支援室 Stella のスタッフ会議を定期的に開催し、利用学生についての情報交換を行い、学生が利用を望む時間に即応できる環境づくりに努めたい。必要に応じ、ピアサポートのスタッフも会議に加え、本学のサポートに対する精神を伝授し、さらなる支援室の充実に努めたい。そして、季節に応じた企画等を考え、学生がもっと気軽に足を運べる場として、学修支援室 Stella を提供したい。

2021 年度に実地調査を受けた公益財団法人大学基準協会による認証評価では、本学の学生支援に対して S 評価を受けることができた。学生を知り、学生との信頼関係を確立させ、学生個々が望むサポートを適切かつ丁寧に対応し、超小人数の大学だからこそ成しえる学生支援を実現するために、積極的なアプローチを今後も続けていきたい。

6. キャリア委員会

P【目標】基準6-④、7-②、10-⑤

低年次からのキャリア教育を促進させ、主体的に行動し自ら進路を選択できるようにキャリア支援プログラム及び体制を充実させる。

- ① 低年次から参加できるキャリアイベント、機会の創出と提供
- ② 個人面談利用者数の向上
- ③ キャリアサポーター制度の導入

D【現状説明】

就職活動は年々早期化しており、早く就職活動を開始した学生の中には3年次生の10月に内定を得ている。2020年度、2021年度と新型コロナウイルスの影響で企業の採用活動は制限され、面接試験も1次・2次面接ではオンライン面接が主流となっており、採用側も人物評価がし難い状況である。その結果、3年次生対象の夏季インターンシップにおいて採用を行う企業が増えている。

また新型コロナウイルス感染症の影響で観光事業者では航空業界、旅行業界の回復が遅く採用が抑制されている。また就職内定率が英語観光学科では2022年2月の状況では85.7%と前年同期比で4.7%向上しているが、観光業界の就職内定率は2020年と比較して半減している状況である。

このような状況下では更なる低年次からのキャリア教育の支援が必要であり、そのためには学生が主体的に行動し自ら進路を選択できるキャリア支援プログラムが必要である。

①-1. キャリアプログラム

キャリアプログラム 基礎演習Ⅰ・Ⅱ(1年次対象)

2021年度 内容・担当	
KAISEI パーソナリティを学ぶ(学長)	本校のキャリア教育(キャリアセンター員)
適性検査(キャリアセンター員)	将来のために今やるべきこと(学科教員)
適性検査の結果報告(キャリアセンター員)	

※英語観光学科はオンラインとハイブリット授業、心理こども学科はハイブリッド授業で実施

キャリアプログラム 海星学Ⅰ・Ⅱ(2年次対象)

2021年度・春学期 内容・担当	2021年度・秋学期 内容・担当
① 「社会を知る」(日本年金制度)	「卒業生によるピアサポート①」
② 「社会で働く」とは(外部講師)	「卒業生によるピアサポート②」
③ 「職種・業界」を学ぶ(外部講師)	「社会で働く①」(職員)
④ 「キャリアを考える」(職員)	「社会で働く②」(学科教員)

※海星学Ⅰはオンライン授業、海星学Ⅱはハイブリット授業で実施

キャリアプログラム1 「卒業生によるピアサポート①」※

*:ET:英語観光学科、PC:心理こども学科

10月26日 PC 学科:武田 貴妃さん(2015年3月卒業/公立小学校教諭)

11月 2日 ET 学科:中村 友香さん(2020年3月卒業/尼崎信用金庫)

キャリアプログラム2 「卒業生によるピアサポート②」※

*:ET:英語観光学科、PC:心理こども学科

11月 2日 PC 学科:三浦 千佳さん(2017年3月卒業/神戸市立保育所)

11月 9日 ET 学科:玉木 優里さん(2019年3月卒業/ウェスティンホテル大阪)

※10月26日以外はどちらの学科を受講するかは選択制

2020年より2年次にキャリアプログラムを追加し、自身のキャリアに対する意識を深め、より実社会との関係性が構築できるようになった。本学のキャリア教育の根幹は本学の教育理念である「社会や企業が求める人間力を身につけるため」という KAISEI パーソナリティの学修を通して、学科教員、外部講師、キャリアセンター職員及び卒業生の講義により実社会でのニーズを把握することで自己成長の目標設定を行い、それに向けて学修や研究を深めていくことでキャリア形成を明確にできると考えた。

①-2. 就職支援及び資格取得プログラム

昨年まで3年次生のみに告知していた就職支援プログラムを1・2年次にも告知を行った。

- ・就職活動体験発表会(10月) 2年生 4名参加
- ・企業研究セミナー (11月) 2年生 1名参加
- ・就職講演会 (12月) 2年生 3名・1年生 1名参加

①-3. 観光業界の中で志望者が多い航空業界のプログラムを実施

1年次及び2年次を対象とした「キャビンアテンダント・グランドスタッフ講座」を夏季集中講座として実施した。このプログラムは面接のノウハウ的なプログラムではなく、低年次向けにカリキュラムを考え、CA・GSに必要な基礎力や素養を身に付け、プログラム終了後も自らが目標に向かって努力できる内容とした。講師には現役のキャビンアテンダントを迎える、4日間の集中講義を実施し、1年次生 6名、2年次生 6名の 12名が参加した。

② 個人面談利用者数の向上

今年度の個人面談者数は 627 件と前年の 511 件と比較して 123% 増加した(2月 15 日現在)。昨年と比較し3年次生の個人面談が前年同期比で 3.2 倍と大幅に増えた。この状況からも就職活動の早期化が伺える。昨年までは3年次生の個人面談は 12

月頃から増え始めていたが、今年度は7月～8月から個人面談が増えており、3年次生対象の夏季インターンシップへの対応が要因と考えられる。今後も採用側のインターンシップからの採用が増えると推測されるので、この傾向が続くと考えられる。

③ キャリアサポーター制度の導入

就職活動体験発表会に登壇した学生の5名を「キャリアサポーター」として任命した。3年次生就職活動の直前に「この時期何をしたか」、「面接ではどのような質問があったか」など実体験の情報を提供することで、3年次生の就職活動支援を行った。4年次生が語る就職活動のリアル情報@Zoom～キャリアサポーター(内定者)第1回として、2/24日にオンラインで開催した。卒業後は連携を続けながら「ピアサポート」として、本学の人的財産としていきたい

C【点検・評価】

①-1. キャリアプログラム

1年次のキャリアデザインの講義ではグループワークを中心に行われ、自己のキャリアについて考えて行動できるようになることが到達目標である。講義では適性検査を実施し、社会で生きてく中で人、社会、仕事そして自己分析を行い、これからキャリア(仕事)を考えていくことができた。学生は社会情勢や雇用形態などより具体的な社会人として必要な知識を修得し、社会を知ることができた。

2年次の「海星学」では春学期4回、秋学期4回の講義を実施した。春学期は「社会を知る」「社会で働くとは」「業種・業界を考える」「キャリアを考える」について外部講師及びキャリアセンター職員による講義を実施した。学生からは秘書検定など就職に活用できる資格取得の必要性が認識されたとアンケート回答が示している。

また、英語観光学科では秋学期のピアサポートプログラムにおいて宿泊業、金融業の卒業生による講義では親近感を感じ、それぞれの業務内容やその仕事に就くために必要な知識や能力を知る契機となり、学生からのアンケートからも「業界・企業研究の必要性」「TOEICスコア向上や資格取得の必要性」「インターンシップの重要性」など多くの回答があった。PC学科では公立小学校、神戸市立保育所から実際の教育現場について話を聞くことができ、学生のアンケートからも「子供と関わる仕事についてより考えることができた」などの回答が多くあった。これらのアンケート調査から学生への就職活動における目標設定ができたと考える。

①-2. 就職支援及び資格取得プログラム

秘書検定2級では2020年の受験者数が28名であったが、2021年の受験者数が34名と前年比121%と大きく増加した。これは海星学におけるキャリア学修の成果と言える。また、低年次に参加できるプログラムも増やしたことと1・2年次生のキャリアへの関心

が高まり、インターンシップ(オンライン)への参加もあった。また昨年は参加者が無かった企業研究プロジェクトを通じて、自分のキャリアプランを考える「わたキャリ」(兵庫県主催)への参加者があった。

①-3. 観光業界の中で志望者が多い航空業界のプログラムを実施

学生のアンケート結果として講義内容の満足度は100%と非常に充実した研修であった。特に学びについては「自分の強みやなりたい自分を人の前で話すことで自信が持てた」「マジックワードなど相手に対するサービス、ホスピタリティについて学べた」などこれらの学びに繋がる有効なプログラムとなった。

② 個人面談利用者数の向上

利用者数は増やすことができたが、「個別面談」が増加するほど、セミナーへの参加者が減少する傾向にある。個別面談は、セミナーを強化・補完するものである役割を周知していくことが必要であると考える。

③ キャリアサポーター制度の導入

本年度からスタートした制度でまだ評価はできないが、3年次及び低年次生への学生サポーターによる支援体制を築き、卒業後も在校生へのキャリア支援を行う体制を強化させたい。

A【改善策】

① 低年次から参加できるキャリアイベント、機会の創出と提供

1年次・2年次のキャリア教育としては、一定の成果が出ていると考えており、次年度も踏襲していく予定である。「卒業生のピアサポート」は卒業して2~3年程度の在校生と年齢の近い卒業生を招聘し、学生と親近感がとれるよう配慮していく。

また就職支援及び資格取得プログラムに関しては、現状は3年次生のプログラムに低年次生を参加させているだけなので、低年次生向けのキャリア支援セミナーを提供していく必要があると考える。学生のニーズを考慮し、公務員試験の対策講座等の開講も検討を進めていく。

航空業界のプログラムは講師のスケジュールによる都合や有料プログラムとしたため、学生の参加が限定的であった。次年度からは英語観光学科の1年次生からの配当授業として夏季集中講座で7.5回の講義を開設することでより多くの学生が参加できるよう改善した。

② 個人面談利用率の向上

キャリアセンターにおける個人面談比率を更に向上させるために、次年度からキャリ

アセンター職員(正規)を採用し、個人面談の量・質共に向上を目指す。またセミナーと個人面談との連携性を考慮し、セミナー内容を検討する必要がある。

③ キャリアサポーター制度の導入

この制度は本年度からスタートしたもので、内容的にもこれから改善する余地はあると考える。キャリアサポーター制度として就職を終えた4年次生が低年次生にピアサポートとして、身近な存在からの指導を受けることで学生視点での学びが得られると考える。そのためにどのようなプログラムを提供できるのかを再考し、低年次生への学びへと繋げていきたいと考える。また、今後はOG訪問に繋げていきたい。

3年次生はコロナ禍で留学にも行けず、様々な経験をする機会を失っており、自己成長が十分に果たせていない状況である。次年度も引き続き学生が志望する就職環境は厳しい状況であり、3年次になってから就職を考えるのではなく、1年次生からのキャリア教育を充実させ、学生一人一人に寄り添ったキャリア支援を教職員の協働体制で推進していきたいと考える。

7. 相談委員会

P【目標】基準7 学生支援②

1) ハラスメント相談委員会

学生と教職員を対象にハラスメント防止啓発活動を行う。ハラスメントについての理解を深め、身近な事例をもとに、対応方法や相談機関について知り、ハラスメント防止への意識を高める。

2) 学生相談委員会

学内の相談体制を整える。

D【現状説明】

1) ハラスメント相談委員会

①学生対象の取り組みとして、2021年7月の基礎ゼミの時間を利用して、ハラスメント防止啓発活動を実施した。新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、研修は学科ごとに分かれて別日程で行った。授業の一環だったこともあり、出席率は92.5%であり、前年度の87%から増加、9割以上の高い参加率を維持できた。昨年度同様、ハラスメントに関する基本的な知識をDVD視聴を通じて学び、また、昨年度までに実施した学生対象ハラスメント防止研修会で取り上げられた事例や質問についてまとめたレジュメを共有した。最後にアンケートを実施した結果、84%がアカデミック・ハラスメントについて「知らなかった」と回答しており、100%が研修を今後の大学生生活に活かせるとと思うと回答していた。また、内容については、程度の差はあるが全員が「理解できた」と回答、理解が「難しかった」という回答は見られなかった。そしてハラスメントに実際に遭遇したことがある、という当事者は、28名であった(内、19名は友人に、14名が家族に、4名が先生に相談していた。その他2名、「彼氏に相談」と回答、複数回答可)。ハラスメントに関しては、年々、「相談しなかった」と回答する学生の数は減少しており、今回も相談なしは3名のみであった。前年度、相談したという回答は14名で本年度は倍増しており、被害に遭った場合の相談しやすさに変化が生じているようである。最後に自由記述においては、本年もまた、無自覚なハラスメント事例への驚きについてのコメントが多く、アルバイトや学外サークル等でのトラブルについての関心の高さが明らかになった。また、ハラスメントという言葉は知っていたが、その種類や内容について初めて理解できた、知識があることは大事だと思った、すぐに相談に行くようにしたいと思う、被害の方(友人等)の力になりたい、等、多くの学生から肯定的な回答が得られた(資料1)。今年度の特徴として、机をたたくのも、威圧するのもハラスメント、と、今まで自分がかつてされていたことがそうだったかもしれないという気づきのコメントが多かったように思われる。

②の教職員対象の取り組みとして、2021年9月の成績会議の前、午前10時30分から90分の教職員対象ハラスメント防止研修会を実施した。講師には昨年度に引き続き社会保険労務士の畠田先生をお招きし、職場のパワーハラスメント防止その2、として最近起きているコロナ関連の問題をテーマに取り入れて講義していただいた。新型コロナウイルス対策として、オンライン研修参加を可能とする形式とし、リモート参加が難しい教職員のため、フロアでの聴講も可能とするハイブリッド研修となった。事前に全学への研修告知と、非常勤講師には個別に会の案内を配布した。その結果、出席率は専任教員が1名のみ欠席、リモートで参加しやすかったからか、非常勤講師も9名(対面実施の際は3名)参加した。職員の参加は13名で、合計42名で昨年度よりは8名減であったが、対面実施の2年前よりは参加が多かった。講義を通じて職場のパワーハラスメントについて、昨年度の振り返りを実施し、改正労働施策総合推進法やすべての事業所においての法改正についての解説、コロナ禍ゆえに生じているコロナハラスメント、また、リモートハラスメントといった新しい事象についての紹介とそこへの対処法について説明があった。その後、「コロナハラスメントを起こさせないようにするために」等のテーマでのグループディスカッションを実施することができた。双方向のコミュニケーションを心がけ、相手の話を聞き、相手の気持ちを想像することでパワハラは防止できることの重要性が示され、無意識に自分が加害者になっていないか振り返りのチェックなども実施された。非常にわかりやすい講義であった、と今年度も好評であり、参加者の100%が今後の業務や生活に活かせると思う、と回答していた。リモート中心のハイブリッド研修ではあったが、前年度の参加者が希望していたグループワークが実施できたこと、また新しい内容についても触れることができたのが有意義であった(資料2)。

2)学生相談委員会

昨年度の課題であった学科ごとの学内相談機関利用機会のバランスの悪さを是正するために、本年度開始された大学全体の取り組みを積極的に活用することができた。①欠席カードシステムの導入、それに伴う②欠席超過等の学校不適応の学生への担任による面談が実施され、その後学内相談機関の紹介が活発に行われた結果、本年度は昨年度各1ケースのみだったET学科の学内相談機関利用機会が増加し、支援を必要としている学生が学内相談機関に繋がりやすくなつた。

学内の相談機関の広報のために、チラシや実施スケジュール・カレンダー等の作成を学生課・保健室等で実施していただき、より身近なところで相談機関が目に触れるよう、ミニカードのトイレ等への設置等を試みた。その後、学生課の手配で、ゼミで学内相談機関への案内カードの配布が行われた。

委員会以外に、学生相談室の相談員の先生方や保健センターの今村先生との連絡会を実施した。学内での個別の支援が必要な事例に関しては相談員の先生方と複数回カンファレンスを実施

した。また、メールや電話で相談室の業務の実施状況について問題ないか、確認を行った。

昨年作成した相談の実施報告書のフォーマットを使用して、年度末書類として実施状況の提出を依頼した。

サポートルーム Stella に関しては、本年度新たに相談員を増員し、平日毎日開室が可能となつた。相談業務が今回初めてとなる山根相談員のフォローとして、相談委員長が毎週木曜日 Stella に一定時間待機して、山根相談員のサポートを行った。利用学生の学生生活を支えるために、個別に連絡をし、Stella への来室を促した。合格基準の難しい科目のフォローとしても Stella での支援を利用するよう学生に声掛けを実施した。

C【点検・評価】

1. <長所・特徴>

1)ハラスメント相談委員会の実施した 2 回の研修会について、①学生対象研修会は対面実施ではあったが、いつもよりも多い研修参加が可能となった。一方でハイブリッド研修ではあったが、②教職員対象研修会は、前年度比で非常勤教員の参加者が半減、職員の参加がマイナス 4 名と全体的にやや前年度よりも参加率が低下した。

①については、アカデミック・ハラスメントを知らない学生が 84%おり、研修実施の意義が再確認されたと言える。また、ハラスメントという概念自体は一般にも浸透しており、ハラスメントに遭遇したことがある、と回答した学生がこれまでで最も多い 28 名であったが、そのほとんどが友人や親、教員などに相談することが出来ていた。このようなことが世の中には存在すること、注意して巻き込まれないようにすること、遭遇してしまったらすぐに誰かに相談することが大切であること、そして、お互いを尊重する人間関係を構築することが重要ということを学んだと、学生の自由記述からわかり、全員が有意義な研修会であったと評価していた。研修後、ハラスメント相談委員会に 3 件の相談があった。1 件は学内事案、2 件は学外事案であり、いずれも対応済である。3 件ともに研修実施後の 7 月に相談が集中しており、研修実施の効果と考えられる。

②の研修参加の人数の減少については、前年度と同じ講師、同じパワハラがテーマの研修であったことが影響したと考える。しかしながら、今年度の研修には、前年度の内容の復習に加え、コロナハラスメントやリモートハラスメントなど、現在生じてきている新たな問題への認識や対処法について学び、グループディスカッションを通じてテーマについて考えるという新たな視点が設定されており、時節に合った研修であった。また毎年研修を設けることで、日常の自分自身のハラスメントについて各自が振り返る機会となった。アンケートを通じ、全般に好評なコメントが多く、全員が有意義な研修会であったと評価していた。

2)学生相談委員会においては、大学全体の取り組みを通じ、学科によって生じていた学内相談

機関利用機会のバランスの悪さを解消することができた。また、会議を通じ、ケースに必要とされている支援内容を把握して、学生が希望を持って学生生活を送れるように、相談支援・学習支援利用を推奨することができた。

その結果、本年度、学生相談室 Marisにおいては、利用実績が4月から12月までで、前年度比(2月までの実績集計との比較)、利用者的人数が2.5倍増、延べ利用数は1.4倍となり、ET学科利用率も、全体の約40%と増加した。

また、学習支援室 Stellaにおける支援利用者はピアサポートを含めて前年度比(2月までの実績集計との比較)、利用件数が75%と減少したが、これは、昨年と異なり1月半ばまでの集計であったことや、学期末がオンライン授業に切り替わり例年の駆け込み相談対応ができなかったこと、Stellaの開室時間外の対応について相談件数にカウントされていないこと、前年度からの継続ケースを本年度も相談委員長が担当しており、その件数がStellaの実績にカウントされていないことなどが挙げられる。時間外対応や、相談委員長の支援実施回数を含めると、利用件数は前年度を大きく上回る実施件数になることが予想される。ET学科利用率も、昨年度よりも増加している。

そして、学内相談機関の支援対象者のうち、本人が継続して来室できたケースに関しては、本年度も退学者は0名であった。

2. <問題点>

1)毎年①の研修後に学生からのハラスメント相談が集中していることから、ハラスメント事案が春学期中に発生しているが、②の教職員対象の研修の実施がこの3年、毎年9月に実施されており、研修実施は学期が終わってからになっていたため、春学期のみ担当される先生方の予防意識の向上に繋がりにくい。また、近年学生からの訴えの対象となるのが非常勤の先生方であり、専任教員はほぼ全員が毎年研修参加しているが、非常勤の先生方の参加は本年度半減しており、研修への参加の働きかけが急務と考えられる。また職員対象のパワハラ研修についても、常に新任職員も入職するため実施は必要だが、同じような内容が続くと職員の研修参加者も減少していることから、実施形態の工夫が求められる。

2)特に学生相談室 Marisについてだが、利用者数の急増に伴い、対応できる枠が限られてきている。相談面接のほとんどが継続ケースとなるため、件数が増加すると、新規ケースへの対応が困難になる。現時点でPC学科の心理士の資格を持つ教員が各自で個別対応を実施しているが、専任教員で授業のコマ数も多く、委員会委員長や役職者であるため、空き時間の確保が難しく、夜間や休日のリモート対応もやむなしの困難な状況にある。

A【改善点】

- 1) 学生に教員が出会う前に、学生が 7 月に学習する教材とそれに準ずるものに教員も目を通して、ハラスメント防止についての共通理解を深める機会を設けるべきである。しかも、専任教員だけではなく、全ての教員がその内容について理解していることが求められる。そのためには、非常勤教員の多くが参加する 4 月 2 日の教員懇談会において、学生対象ハラスメント研修会で用いる映像資料を視聴し、また、事例と対応のレジュメに目を通せるように工夫する。欠席者にも資料配布を行い、授業開始日までに必ず目を通しておくように依頼する。
- 2) 学生相談室 Maris の開室日の増加を依頼している。ゼミがあり、全学生が登校している火曜日の開室を可能にすることで、ゼミ後に担任が相談の必要がある学生と一緒に相談室を訪れることが可能になる。
また、学習支援室 Stella の開室日も、現在全日程オープンではあるが、実際には水曜担当の中園先生は専任教員で委員会等の会議日であるため、予約が取りにくい状態にある。そのため、山根相談員に水、木の 2 日間入っていただけるよう枠の増加を依頼している。
学内相談機関のET学科の学生の利用率は増加しているが、依然PC学科の学生の利用率の方が高いため、ET学科の学生が利用しやすいような工夫を今後も行っていく。担任対象の相談日などを設定し、積極的に利用を促していく。

8. 入試委員会

P【目標】基準5-③

2022年度入試において、両学科で入学定員を確保する。

D【現状説明】

本学ではコロナ禍前の2020年度入試まで4年連続で入学定員を確保できたが、2020年度から続くコロナ禍の中で思うように募集活動ができなかつたこともあり、入学定員を確保できず、2021年度非常に厳しい結果となった。

コロナ禍が続く中、兵庫県は4月25日～6月20日と8月20日～9月30日と緊急事態宣言の対象地域となり、募集活動はコロナ感染予防に配慮しながらの活動となった。

次の募集活動は計画通りに行われた。

- ・大学案内、各種リーフレットの作成
- ・ホームページでの本学の内容紹介
- ・SNSを活用した副次的広報
- ・DMハガキを複数回送付、業者からも別に送付
- ・一斉メール(メールマガジン)の配信
- ・高校宛の一斉FAX(入試・オープンキャンパス情報)=月1回程度
- ・来校者や進学相談会参加者に対応した教職員による礼状の送付。

次の活動はCOVID-19に配慮して行った。

・WEB上の進学相談会実施

業者主催の高校内ガイダンスや会場型ガイダンスは軒並み中止となつたので、受験生の相談機会を確保するために、本学サイト上においてWEB上で相談できるシステムを構築した。

① WEB上のAO[KAISEI]入試事前面談実施

これまでオープンキャンパス時を中心に対面での事前面談を行ってきたが、外出機会が制限されている中、WEB進学相談のシステムを利用する形で、WEB上でAO[KAISEI]入試の事前面談ができる環境を構築した。

②「おうちでオープンキャンパス」サイト開設

4月のオープンキャンパスや、5月の教員対象説明会が軒並み中止となる中で、入試制度の説明や学校紹介を見る機会を作るため、本学ホームページ上に「おうちでオープンキャンパス」ページを創設。各種動画コンテンツを中心に、最後はWEB進学相談ができるように整えた。

③ 在学生スタッフとの交流実施

オンライン上で在学生スタッフと交流できる機会を設定し、高校生、保護者等の来場

者及び本学学生の感染防止に努めながらも、本学の「超小人数」教育を在学生のことばで説明する機会を設けた。

・オープンキャンパス

以下のように感染防止に配慮し、夏期を中心に7回、それに加えて個別相談型オープンキャンパスを開催した。

- ① 春のオープンキャンパスは中止。
- ② 来場者数を抑え、3密環境回避

これまで 10 時～15 時 30 分まで通し開催していたものを、午前・午後の2部開催制にし、さらに「事前予約制」として来場者の事前確認ができる体制を整備した。また、予約人数にも制限を設け、短時間でかつ少人数で実施した。(午前・午後各学科 10 名。1 日最大 40 名)

- ③ 来場者の検温及び消毒体制の整備

来場者全員に、受付で検温及び手指消毒を実施。学内各所に手指消毒ジェルを配備。受付など来場者が着席した座席において、使用後のアルコール消毒を徹底した。

- ④ ソーシャルディスタンスの徹底

各相談ブース間において2メートル以上の間を空け、面談者と相談者の間に飛沫防止パネルを設置した。

・土曜進学相談会(祝日や入試開催日を除く)

指定した土曜日に学内で進学相談会を行った。教員 1 名職員 1 名を配置して、来校した高校生および保護者に対応した。それ以外の曜日も希望者があればアドミッションセンターを中心に対応した。

今年度は COVID-19 の影響で、春学期は基本的に Zoom を使っての説明となった。秋学期は対面での対応を中心とし、遠隔地の場合など希望があれば Zoom で対応した。

・高校等での進学相談会・出張授業(104 件)

・高校訪問(全教職員で 1 校につき複数回)

これらについても感染拡大防止に配慮し、訪問校の先生と相談しながら、慎重に行った。昨年度から高校訪問のために入試アドバイザーを 1 名採用したが、今年度さらにもう 1 名増やし、教員の訪問を極力減らして、負担を軽減した。

教員対象説明会は 5 月中旬から下旬に計画していたが、緊急事態宣言発令中であったため、本学で行う予定の 2 回をリモートに切り替えて実施し、学外開催のものは中止せざるを得なかった。

以下のような多様な入試日程を設定した。

- ・AO[KAISEI]入試(Ⅰ期～Ⅲ期)
- ・指定校推薦(1次、2次)
- ・自己推薦(A～C日程)
- ・学校推薦Ⅰ・Ⅱ
- ・一般入試(前期A・B日程、後期A・B日程)
- ・大学入学共通テスト利用(Ⅰ～Ⅲ期)

Ⅰ期で、2科目型、3科目型を設定

入学試験実施をめぐっては、COVID-19 感染防止対策として、以下の対応を行った。

① 受験者の検温及び消毒体制の整備

受付で検温及び、手指消毒を実施。面接待合室前など学内各所に手指消毒液を配備した。

② 面接待合室においてソーシャルディスタンスの確保

受験生同士一定の距離が保てるよう、控室座席を全席指定に。面接開始時間に合わせて、受験生の受付時間を変更し、面接控室が密になることを避けた。

③ 面接室での換気対策

面接室の窓は常時開放し、空気の循環ができるように環境整備。

④ コロナ罹患者及び、当日体調不良者への追試験対応

試験当日に風邪のような症状、または37.5℃以上の発熱があり、試験開始時間までにアドミッションセンターに連絡があった受験生に対し追試験を認める措置を設定した(要申請書提出)。

⑤ その他(調査書の取り扱いについて)

点数化する予定であったが、評価を【参考程度】に変更した。

入学生を確保するため、以下のような授業料免除、奨学金制度を設定した。

・英検2級相当以上の資格を有する入学者に授業料免除制度

資格のスコアに応じて1年間または春学期、春学期の半額の授業料を免除する。

・奨学金給付制度

指定校推薦、学校推薦Ⅰ・Ⅱ日程の専願受験者で奨学金給付生試験の受験者各学科1名の成績優秀者に、入学年度の春学期及び秋学期の授業料等の半額相当額を給付する。

・入試成績優秀者奨学金制度

一般前期A・B日程及び大学入学共通テスト利用Ⅱ・Ⅲ期で学力検査の得点率が80%以上の受験者、大学入学共通テスト利用Ⅰ期で学力検査の得点率が70%以上の受験者に入学年度の1年間の授業料及び施設設備費を免除する。

・入学金免除制度

指定校推薦および自己推薦 A、学校推薦Ⅰ・Ⅱの専願者で同窓生子女及びカトリック系

高等学校出身者を対象として入学金を免除する。

- ・大学入学共通テスト利用Ⅰ期の3科目型志願者で学力検査の結果が得点率70%以上の志願者すべてに入学金の一部(10万円)を免除する(入学後の返還)。

以上のような奨学金制度、入学金免除制度を設け、入学者増をはかった。

C【点検・評価】

オープンキャンパスは、予定通り開催したが、COVID-19 感染拡大という状況が続いたために昨年同様予約制とせざるを得ず、参加者は昨(2020)年に比べれば高校生は若干増えたが、2019 年度以前に比べると激減している。今年度は 193(昨年 186)名、保護者等が 107(昨年 140)名で、一昨(2019)年は高校生 368 名、保護者 262 名であった。オープンキャンパス参加者の約 3 割が受験に結びついていた本学としては、大きな打撃であった。なお、土曜進学相談会での来校者は 5(昨年 3、一昨年 26)名であった。

そのため、志願者も同様に激減した。英語観光学科は 36(昨年 71)名、心理こども学科は 43(昨年 68)名、全学で 79(昨年 139)名、合格者は英語観光学科 33(昨年 66)名、心理こども学科 40(昨年 67)名、全学で 73(昨年 133)名であった。

入学者定員を確保することができず、入学者は 34 名(昨年 81)、うち編入学者 4 名で、学科別では英語観光学科 16 名(うち編入学 4 名)、心理こども学科 18 名で、大きく入学定員を下回り、充足率は 31.6(昨年 84.2)%となった。昨年度と比べれば、52.6%減である。

今年度の学生募集状況の厳しさの背景には少子化とともに、女子大離れ、大規模校志向などがある。また心理こども学科は数年前から志望者減少傾向が続いており、さらに COVID-19 感染拡大の中で観光業が大打撃を受けたことから受験生から英語観光学科が敬遠されるなど、様々な要因がある。

他大学の動向も本学の学生確保を難しくしている。多くの大学が以前よりも多くの合格者を出し学生確保に努めるようになった。数年前から入学定員の厳格化が求められ、基準を超えないよう合格者を絞らざるを得なくなり、本学にとって比較的学生が確保しやすい環境があった。しかし、大手の大学は学部増設や定員増によって多くの学生を確保しようとし、さらに定員の厳格化がそれほど厳しく求められなくなると、より多くの学生を確保するために合格者を増やした。そのあたりを受けて中位校は早めに、年内に学生を確保しようとするようになった。中には公募推薦などで年内に学生を集めようとして高校訪問などでも合格を保証して公募推薦などの受験を勧めるよう求めるものもあったようである。

受験生としては、これまでなら学力的に合格できなかった大学に入れるということで、上位校・中位校への志望が強まった。多くの私学志願者はこのようにして年内に進学先を決めてしまい、年明けの一般試験や共通テスト利用の日程にはほとんど志願者がいないという状態になっていた。

このような状況に本学が全く対応できなかつたことが、今年度の学生募集結果となつたと考える。

A【改善策】

英語観光学科の志願者激減は、COVID-19 感染拡大によって観光業が大打撃を受けたことにもよるのであろう。しかし、ワクチンや治療薬が開発され、COVID-19 の問題が収まりさえすれば、観光業も復活することは間違いない。来年度以降は今年のようなことはないと思う。近年、世界的に認知されている日本の文化や自然、治安の良さをアピールし、実際に体験してもらうことの素晴らしさ、やりがい等をしっかり広報していきたい。

心理こども学科も激減した。本学の「超小人数教育」やきめ細かな指導、また 2021 年度保育教諭実就職率が全国女子大第 1 位であることなどを積極的に広報していきたい。

このような状況の中で、本学としては小規模な女子大学であっても魅力や特色を明確に提示し、高校生に訴えていかねばならない。大阪や兵庫の高校の先生方には海星は知名度が低いわけではない。しかし、高校生に十分に浸透しておらず、海星の魅力・特色を知つてもらわなければ彼女らを引き付けることはできない。海星の教育の魅力・特色を再確認するとともに、新たな魅力・特色を生み出していかねばならない。

年内の受験者数は、英語観光学科は昨年度の 43 に対して 12、心理こども学科が昨年度の 34 に対し 20、大学全体で昨年度 77 に対し 32 と半減以下となり、入学者数は英語観光学科が昨年度 35 に対し 10、心理こども学科が昨年度 34 に対し 16、大学全体で昨年度 69 に対し 26 名と、昨年は例年並みであった年内の入学決定者数が激減した。

年明け以降はさらに厳しく、一般入試の志願者は、英語観光学科では昨年 27 名が 18 名、心理こども学科では昨年 34 名が 23 名と、年明け後に行われる試験において受験生が激減している。入学者数は両学科で 2 名ずつであった。今年度も受験生の早期決定志向は続くであろう。年内入試への誘導に注力することは必須である。

高校訪問については、昨年度はコロナ禍ということもあり、入試アドバイザー中心に行つたが、今年度は各教員に 1, 2 校割り当て、入学者や在校生のいる高校、受験、入学実績のある高校を中心に回つてもらおうと考えている。以前の訪問で高校の先生と関係ができている高校に行っていただき、その高校の卒業生の大学での様子などを伝え、その学生についての情報交換することで、指導に役立てるとともに、高校側にひとりひとりに目を配った指導をしていることを分かっていただき、本学なら安心して卒業生を任せられると信用していただくことで、今後の学生募集にも良い効果があるであろう。

また、国語の試験問題について、高校訪問担当者から記述問題の多さが受験生に敬遠される原因であるという意見があった。近隣の競合校の問題はほとんどが選択問題であり、記述問題が多かった海星が避けられたということは大いにあり得ることである。来年度はこのことも学生確保のために配慮していかねばならないと考える。

9. 宗教委員会

P 【目標】基準1－①、②

キリスト教的価値観に学生が触れる機会を安全に提供できるよう創意工夫する。

D 【現状説明】

1. 本年度のキリスト教関連行事について、また2. 学校行事以外の活動の実施について報告を行う。

1. 本年度のキリスト教関連行事について

令和3年度は新型コロナウィルス感染防止のため、キリスト教関連行事のほとんどが安全面を配慮し実施形式を変更して行われた。

① 1年次生の新入生オリエンテーション1に含まれる宗教行事のうち、「聖堂オリエンテーション」は、2学科を分けて別々に実施した。その後、感染状況が悪化したため、授業がオンラインになり、「ミサの理解」と5月に予定されていた「新入生オリエンテーション2 大塚国際美術館見学」は中止された。その代わりとして、研修当日の午前中に、DVD『マザー・テレサの遺言』を視聴し、インドを中心とした社会的弱者救済活動に人生を捧げたマザー・テレサや賛同者のクリスチャンとしての生き方について学び、ワークシートを用いて自分の人生における役割について考える機会を設けた。

② 5月に予定されていた2年次生のキリスト教研修1（カトリック夙川教会）も中止となった。この学年は入学式の式典の実施も、1年次のキリスト教行事も全て中止で体験ができなかったため、入学式の代わりとなる「入学感謝ミサ」として入学を祝い、これから的学生生活に神の加護を祈る機会とした。司祭は神戸中央教会のエマニュエル・ポン師で、学生は、祈願カードをミサの中で司祭に渡し、司祭から祝別されたメダイが一人一人に贈られた。

③ 同じく5月に予定されていた3年次生のキリスト教研修2（布引ハーブ園）も中止となった。その代わりとして、研修当日の午後に、DVD『マザー・テレサの遺言』を視聴し、インドを中心とした社会的弱者救済活動に人生を捧げたマザー・テレサや賛同者のクリスチャンとしての生き方について学び、ワークシートを用いて自分の人生における役割について考える機会を設けた。

- ④ 10月に例年宿泊研修として実施されている4年次生対象キリスト教研修については、学生の安全を万全に期するため、学科ごとに2グループに分けて1日研修の形で行った。会場は、昨年3年次に予定していた布引ハーブ園の森のホール、講師は昨年同様、三輪久美子先生で、テーマは「与えられたいのちを生きる-喪失から生きる意味を考える-」であった。昨年に引き続き、コロナによる喪失体験とその影響と対策を研修内容に追加した。
- ⑤ 11月に夕べのミサを、完全予約制、20名までの入場制限で実施した。司祭は神戸中央教会のエマニュエル・ポポン師であった。奉納をとりやめ、手指消毒の機会を増やすなどの工夫をした。
- ⑥ 今年度は、昨年実施できなかった12月のクリスマス・ミサを、1年次生対象に学科ごとに2グループに分けて実施することが可能であった。午前はPC学科で、司祭はアルフレド・セゴビア師、午後はET学科対象で、司祭はエマニュエル・ポポン師であった。2年次生以上の希望者も2名の参加があった。クリスマスキャロル、ドーナツパーティは中止となったが、クリスマスキャロルの代わりに、ミサの前に、音楽部・コーラスステラマリスによるクリスマスの音楽が演奏される時間を設けた。また、ドーナツパーティの代わりに、焼き菓子を全学生に配布した。また、教職員有志による教職員のためのささやかなクリスマスの音楽の集いが聖堂で教授会後に短時間で行われた。
- ⑦ 3月に4年次生対象卒業感謝ミサの実施を予定している。司祭は六甲教会のセゴビア神父様、会場は講堂で行う。その後、同窓会入会式と卒業式練習を予定している。卒業式は、個別の卒業証書授与を割愛した形で実施予定である。

2. 学校行事以外の活動の実施について

- ① 本年度の海星協力金は、春学期はオンライン授業のため、学生からの募金は集めず、教職員からの募金を神戸医療従事者ファンドに寄付した。また、秋学期は募金は実施したが、学生の家庭の経済状態の悪化やアルバイトが出来なくなっている状況には配慮を行った。秋学期の海星協力金の一部をサンタ募金とし、その他を、引き続き国境のない医師団、ミンダナオ図書館等、毎年の送付先に振込んだ。
- ② 12月に昨年度から開始したサンタ募金の配布のため、ボランティアの学生7名と灘区内の3か所の児童養護施設を訪問した。感染防止対策に十分に配慮を行いながら、今年度の状況を考慮したささやかな贈り物となつたが、子どもたちはとても喜んでいた。

- ③ 12月に昨年度から始めたミッションシネマの会を実施した。春学期はオンライン授業のため、実施は出来なかった。秋学期は『激動の20世紀を生きた3人のクリスチヤン』というDVDの中から、韓国の児童福祉の先駆けであった田内千鶴子氏の生涯を描いた作品を視聴した。学生が9名程、教職員は1名の参加があった。
- ④ 春休み中に図書館に、キリスト教関連の図書とDVDを追加購入し配置予定である。研修実施がオンラインになった場合に用いる教材として必要である。

C 【点検・評価】

1. <長所・特徴>

昨年度のキリスト教関連行事については、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、その多くを中止・実施形態を変更せざるを得なかつたが、本年度はオンラインを活用し、大集団を作らない形で、可能な限り対面での実施を試みた。その結果、全くの実施ができなかつた行事はなかつた（授業中に実施する「ミサの理解」だけは中止）。

1, 3年次対象の5月の研修は、予定していた学外活動は困難であったが、DVDを用いたワークの実施により、「マザー・テレサについて、よく知らなかつた、姿を見たことがなかつた。」「生き方について考えたこともなかつたが、これをきっかけに自分に何ができるのか考えてみたい」「自分も誰かを支えられるようになりたい」などという感想が寄せられた。2年次生の入学感謝ミサの祈願カードに書かれたメッセージの多くが、自分よりも家族や他者の幸せを祈願するものであり、またコロナの終焉を祈るものも多数であった。4年次生対象の研修ではハーブ園というロケーションに喜びの声もあり、講義については「キリスト教の大学だからこそその貴重な研修だったと思う」「喪失から得られるものについても学ぶことができた」「今いる人、あることに感謝して、周囲の人を大切にしたい」等、前向きな感想が寄せられた（資料1）。そして12月のクリスマス・ミサでは、今では貴重な生演奏の音楽に感動した学生も多く、「聖歌を歌えて嬉しかった」「クリスマスの意味を知れた」「座学ではわからなかつたミサを体験して理解が深まった」等のコメントが寄せられた。アンケートではほとんどの学生が有意義な時間であったと回答していた（資料2）。

2020年の入学生に実施できなかつたキリスト教オリエンテーションを補てんするために、2021年度の5月の研修では、前年度予定していた「ミサの理解」を本学聖堂で実施するという予定だったが、それを入学式も兼ねた「入学感謝ミサ」の形で実施することができた。

2020年の2年次生には配布予定であったメダイを研修中止で配布できず、また本年度の研修もオンライン実施であったため、これをクリスマスのプレゼントとして、各ゼミで配布することができた。

2020年の3年次生には、本年度の研修において、3年次のテーマである「自分の人生の

役割」という視点を講義の中に追加した。

なお、自主研修教材として、キリスト教関連図書とDVDを図書館に寄贈し、コーナーを整え、展示している。

2. <問題点>

今年度は序盤にすべての研修を、いつものように実施する予定で動いていたため、1年次生に対しては、入学式直後に、聖堂オリエンテーションで、大塚美術館の画像を紹介し、県をまたいで移動となる研修への保護者の承諾書のやりとりまでしていたが、結局はコロナの感染状況が急に悪化したため、多くの学生を落胆させる結果となってしまった。3年次生についても同様である。このため、期待をさせてしまった分、それが実施できないとなると、そのあとで何を準備してもそれに不満に感じる学生もあり、「大塚美術館に行きたかった」、「ハーブ園に行きたかった」「行かなかった分の費用は返ってこないのか」という声をあちこちから聞くこととなった。

A 【改善策】

コロナ禍の状況が収束しないかぎり、準備して期待させては変更し、落胆、ということを繰り返す可能性がある。こうしたことは学びへのモチベーションに大きく影響することから、しばらくは、実施の難しい研修は序盤からこれまでとは違う、新しい生活様式に合った形に変更したものを準備し、それを広報していくこととする。保護者会、聖堂オリエンテーションで配布する資料を、新しいバージョンに変更する。

本年度は、活動を中止することなく、自己点検・評価の目標のとおり、安全・安心な形で創意工夫して実施できたと考える。昨年できなかつたふりかえりのためのアンケートも10月以降は準備できた。しかしながら、序盤、急遽変更になった5月のオンライン研修については、ワークシートがあるということで、ふりかえりのためのアンケートの準備を行わなかった。今後は、安全な日常が戻るまで、コロナ禍以前のものをそのまま予定するのではなく、初めから形を変えて計画し、学生の学びをふりかえるためのアンケートをすべての学年において準備する。例年、1年次生の大塚国際美術館と4年次生の宿泊研修が印象に残っていると回答する学生が圧倒的に多い。大塚国際美術館でのバス小旅行やインパクトの強い一日を体験するために、それ以降の学年の研修に、それ以上のものを期待してしまい、せっかくの貴重な講演内容をフラットな状態で受け入れられないのかもしれない。

そのため、今後は、コロナ禍以前に可能だったこれまでの活動を紹介するのではなく、徐々に活動への期待を膨らませていく形を試みる。1年次生は学内で、どこにいけばキリスト教的な精神に触れることができるのか、というテーマでのオリエンテーションを行い、その中でDVD視聴やワークを実施する案を企画中である。その次の年は学外でマリア様についての講話の後で音楽に触れ、3年次では更にハーブ園で自然を愛したフランシス

コについて学び、最終学年で大塚国際美術館、あるいは、ホテルでの昼食を挟んだ一日研修、という形で計画していく。

なお、手配中のキリスト教関連図書と DVD は入荷し次第図書館のキリスト教コーナーに追加し、展示できるように協議していく。

10. 図書委員会

P【目標】

1. 感染予防対策のもと、図書・資料の利用環境を整備する。
2. 「図書ラインナップサービス」の取組みを通じて学生の学修をサポートする。

D【現状説明】

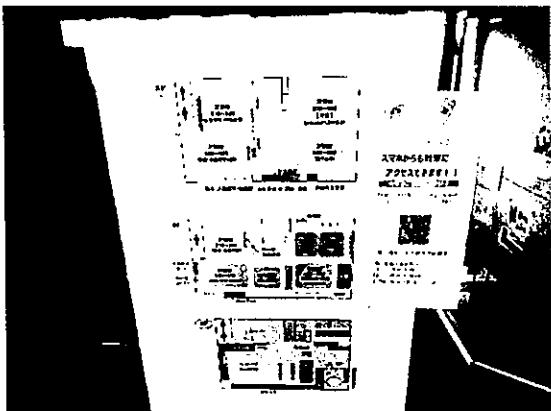
1. 感染予防対策のもとでの図書・資料の利用環境の整備

- (1) 感染防止対策を講じた図書館利用支援方針を作成し、4月27日付および10月1日付で図書館利用についてホームページで発信した。
- (2) 入館時のチェックシート記入と確認を実施し、学生へのカウンターからの声掛けにより注意を促して感染拡大防止対策を徹底した。
- (3) 非接触型のサービスとして、図書館ホームページやOPACへアクセスするQRコードを、図書返却カードや展示および館内掲示に表示した(写真1、写真2)。
- (4) 館内展示は、学生が距離を確保し安心して利用できる環境を維持した。
 - ① 企画展示は4月から1月まで6回実施し、遠隔授業実施に伴い期間を延長した。
 - ② テーマ展示5つ、実習に備える展示4つの計9つを実施し、うち8つは常設展示とし、時期に関わらず利用できるよう図った。
 - ③ 季節に応じた絵本の展示は梅雨・夏・秋(写真1)・冬の季節に対応して実施し、1月下旬から「春を待つ絵本」の展示を実施した。

(写真1)



(写真2)



2. 図書ラインナップサービスの取組み

(1) 図書ラインナップサービスの対象拡大と周知

- ① 6月21日に4年次生、10月5日に対象を広げて3・4年次生へ図書ラインナップサービスを周知した(Google Classroomにより教務課へ依頼)。

(2) 広報とサービスの取組み

- ① 学内掲示およびホームページによる広報や、QRコード(サービスを説明したホームページにアクセスできる)を表示した図書返却カードの配付等、周知を強化した。
- ② メールを活用し、受付や図書ラインナップ完了のお知らせや、サービスを申込んだ後一定期間利用が滞っている学生への連絡をして、個別にサポートした。

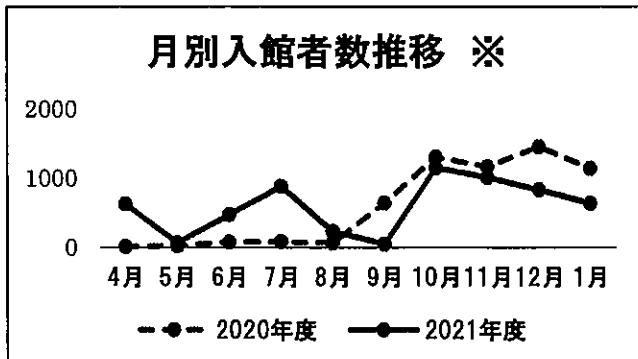
C【点検・評価】

1. 感染予防対策のもとでの図書・資料の利用環境の整備について

(1) 2022年1月31日までの入館者数の推移は(グラフ1)のとおりである。

- ① 感染予防対策を講じて環境整備・書架整備や展示等、図書・資料の利用促進に取組み、利用者の図書館利用が継続している。

(グラフ1)



2021年度の遠隔授業期間：

4月22日～6月19日

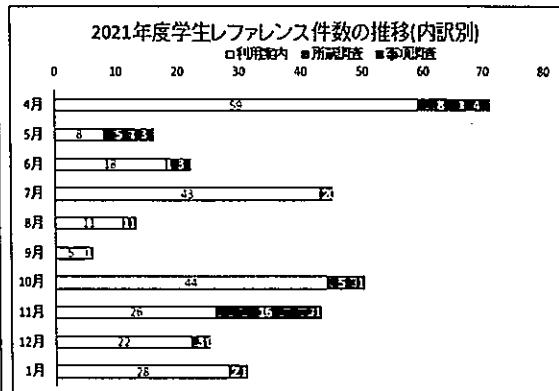
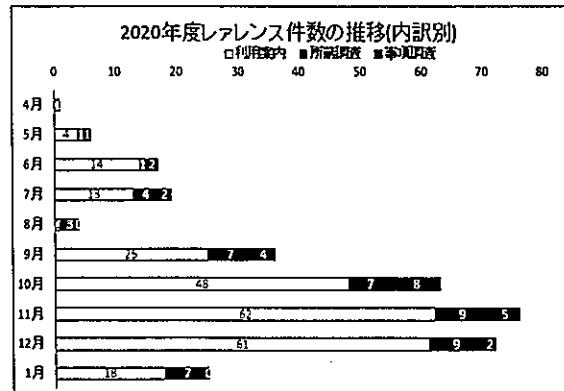
1月25日～2月7日

(注)月別入館者数推移 ※ 2020年度は年間を通して生涯学習講座が中止であり、比較のため2021年度の数値は生涯学習講座受講者の数値を含んでいない。

(2) レファレンスサービス利用件数の推移は(グラフ2)のとおりである。

- ① 新入生対象の図書館オリエンテーションが中止となり、レファレンスサービスで対応した。4月に利用案内が59件あり、対面距離に留意し、短時間で質問者が理解できるよう注力した。
- ② OPACにアクセスできるQRコードの配付を実施する等、利用者に短時間に必要事項を伝えるよう工夫した。

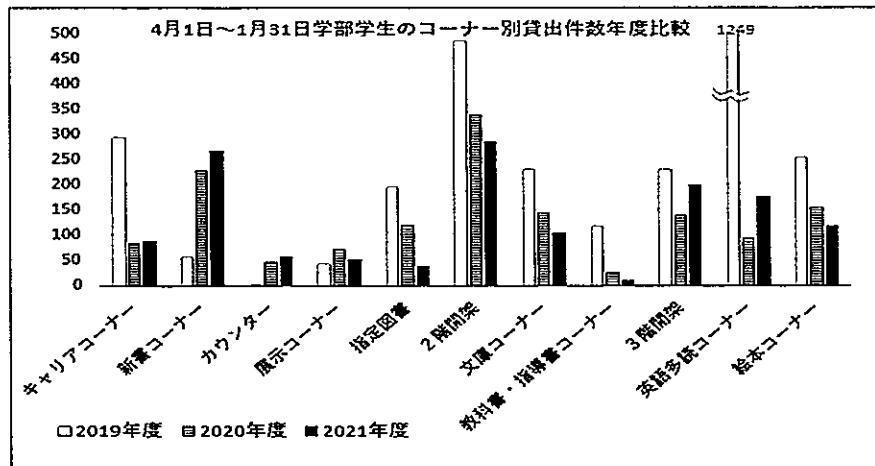
(グラフ2)



(3) 学生の貸出件数について、4月1日～2022年1月31日の期間の各コーナー別の貸出状況は(グラフ3)のとおりである。

- ① 教科書・指導書コーナーの貸出件数は、2021年度は減少した。教科書・指導書コーナーから授業に関連した必要部数の複写利用が401枚あり、(2020年度同期間の教科書・指導書の複写利用枚数247枚)複写しての利用が進んだ。
- ② 指定図書コーナーの貸出件数は、2021年度は減少した。(2021年度は卒業研究に関連した指定図書コーナーへの配架依頼がなかった)
- ③ 英語多読コーナーは、2021年度は174件で、2020年度(94件)より貸出件数が増加した。

(グラフ3)



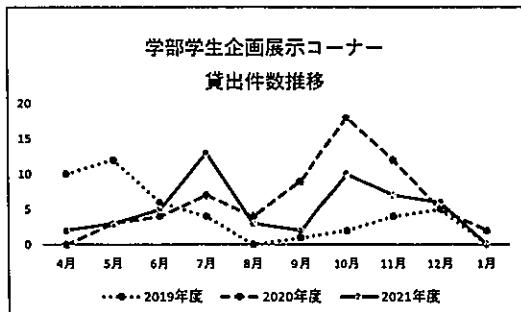
(4)企画展示コーナーの貸出件数推移は(グラフ4)のとおりである。

- ① 企画展示は、短時間に図書を閲覧したり、選んだりできる長所がある。
- ② コロナ禍前と比較して、2020年度、2021年度は積極的に利用された(グラフ4)。

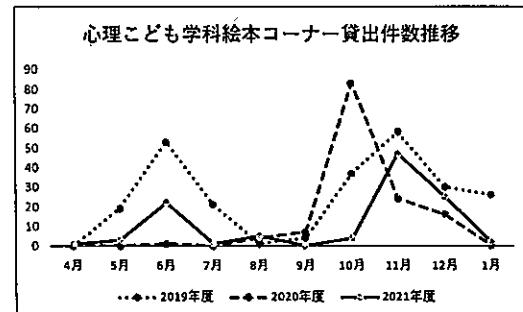
(5)絵本コーナーの貸出件数推移は、(グラフ5)のとおりである。

- ① 絵本コーナーは、心理こども学科の学修に関連性が高く、貸出件数は実習の実施に対応して推移する傾向がある。
- ② 学修、とりわけ実習に利用する絵本にはしばしば季節感が求められ、季節に応じた絵本の展示は学修に役立つ絵本の利用を推進した。

(グラフ4)



(グラフ5)



2.「図書ラインナップサービス」の取組みを通じた学生の学修サポートについて

(1)図書ラインナップサービスについて、4月1日～2022年1月31日の期間の図書の延べ利用冊数は合計109冊である(表1)。

- ① 図書ラインナップサービスを利用した数名の学生から、資料収集に役立ったと報告があった。
- ② 6月に利用冊数が減少したが、6月21日と10月5日のGoogle Classroomで周知後、利用件数の増加があった(グラフ6)。

(2)図書ラインナップサービスでは、感染拡大防止対策のもと、学生が図書を継続的に利用して卒業研究を執筆するサポートを提供できた。

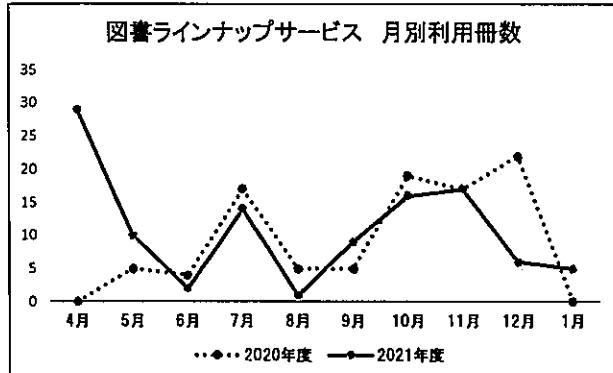
- ① 学生が図書選びにかける時間を短縮しつつ、テーマに関連した図書については時間をかけて内容を確認し利用できる長所がある。

(表1)

2021年度図書ラインナップサービス 2021年4月1日～2022年1月31日までの実施状況				
学生の提示したテーマとその選移	ラインナップ冊数	延べ利用冊数	対象図書の館外貸出件数(日付) 4/1～12/31	館内利用件数(日付) 4/1～12/31
作者が描く理想の主人公について—ディズニーについて	49	13	5(4/8), 1(8/11), 2(9/7)	4(4/8), 1(11/2)
赤毛のアンでみつけた現在の家族の在り方 血縁関係のない親子関係	23	21	10(4/28), 4(7/15), 3(10/5), 4(12/13)	
アリスの言葉遊びにみる言葉遊びの日英比較	19	34	10(4/28), 5(7/20), 9(10/5), 5(11/9), 5(11/30)	
人と関わる力を育む(小学生)を指導するには、なぜ道徳が用いられるのか、道徳が教科化された背景	12	9	3(5/13), 3(9/7)	3(7/30)
日本語と韓国語のオノマトペ	13+22	10	2(6/22), 2(7/6), 2(10/12), 2(11/9), 2(12/7)	
大人向け絵本とは何か	14	3	3(5/27)	
ペットが子どもの健康、発達について与える影響	21	8	4(5/27), 4(9/10)	
ディズニーについてすべて→直後、ディズニーランド以外との指定→シンデレラについて詳しく調べたい	37→22	6	2(10/12), 4(11/9)	
空き家問題・古民家再生	5	5		5(1/18)

143 109

(グラフ6)



A【改善策】

1. 感染予防対策のもとでの図書・資料の利用環境の整備について

- (1)チェックシートにより、入館時の学生のアルコール消毒やマスク着用の徹底が図られており、声掛けと確認を継続していく。
- (2)企画展示は、遠隔授業実施に伴い期間を延長して実施し、学生の利用を推進できた。実習に役立つ図書は、実習の実施期間の変更等に対応できるよう常設展示とした。今後も、期間や展示形態等について柔軟に検討していく。

2.「図書ラインナップサービス」の取組みを通じた学生の学修サポートについて

- (1)コロナ禍に伴う遠隔授業期間中もメール等で連絡を取り、図書ラインナップサービスによるサポートを継続できた。1月に入り3年次生から申し込みがあり、今後もこのサービスを継続して学修サポートを実施していく。
- (2)図書ラインナップサービスを利用する学生が、対象とする図書数冊を館内でじっくりと閲覧する利用形態が2021年度からしばしば見られるようになった。今後も図書・資料の利用環境の整備に努めていく。

11. 生涯教育委員会、地域交流委員会

P 【目標】基準9-③

社会連携・社会貢献の適切性について定期的に点検・評価を行い、その結果をもとに改善・向上を行う。

D 【現状報告】

本学では、神戸市との大学連携講座である、「神戸市老眼大学」「こうべ生涯学習カレッジ」を担当している。本年度は新型コロナウイルス感染拡大防止対策を行ったうえでの開講となり、延べ約 2000 名の来場があった。

また、本学では、大学教育の地域還元という位置づけで、毎年学内において、公開講座と生涯学習講座を開講している。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、生涯学習講座の前半を中止したが、後半は開講し、また、公開講座も開講した。

外部からの依頼を受けた講演としては、神戸市（神戸市教育委員会 2 件・神戸文学館 1 件）、宝塚市（公民館 1 件・8 回）、芦屋市（公民館 1 件）などを、本学教員が担当し、延べ約 1000 名の来場者があった。（2月 16 日現在）

学内で行われた子育て支援事業「海星子育てひろば」については、参加親子を昨年度同様に 11 組に減らして 5 回（例年は 15 組 6 回）の実施を行った。また、「海星子育てひろば」は、「大学と連携したまちづくりチャレンジ事業助成金」の交付をうけ、「子育て親子の交流の場の提供と交流の促進・子育て等に関する相談、援助の実施・地域の子育て関連情報の提供・大学の子育てに関する専門的な知識を地域に役立ててもらう場とする」ことを目的として活動し、報告書をまとめている。

さらに、本学学生の学習成果としては、神戸市立公民館での子供教室「キッズイングリッシュ」出張授業（計 12 回）、大学コンソーシアム神戸主催「キッズフェスティバル」（動画での演奏）、神戸市児童養護施設連盟職員部会主催研修会スタッフ、児童施設 3 か所でのサンタガールズ（クリスマスプレゼント贈呈）などの参加があった。

また、クラブ活動としては、イラスト部の六甲病院アートセラピーボランティア（リモート開催）、バレ一部の神戸市立小学校でのバレーボール指導、アナウンス研究会の地域コミュニティーラジオ FMM00Vへの参加、また、プアナニの第 11 回灘区総合芸術祭への参加などがあった。

C 【点検・評価】

社会連携・社会貢献の適切性を考慮したとき、参加者の安全確保は最優先事項となる。そのため、新型コロナウイルス感染拡大防止の方法が確立する前に実施の有無を決定する必要があった本学の生涯学習講座の前半を中止した。

7 月以降に学内で行われた、子育て支援事業「海星子育てひろば」では、2021 年度は、新

型コロナウイルス感染拡大防止への対応・対策のため、検温を参加親子、指導教員、参加学生ともに行い、体調管理表に記録した。手指の消毒とマスク着用を徹底し、実施中も常に体調を確認した。会場は、密を避けるため、定員を減らした上で、広い教室を複数用意し、窓は全開とした。玩具などの備品も毎回消毒を行った。

9月以降に学内で行われた、生涯学習講座・公開講座も同様に、検温と手指の消毒とマスク着用を徹底して実施した。連続講座となる生涯学習講座においては、受講生や講師にコロナ陽性者が出了場合は、保健所の指示を受けたうえで、次の参加まで、症状が出た日から10日間以上の経過期間を置いた。また、濃厚接触者が出ないようにするため、教室での座席を2m以上空くように設置し、マスクの着用を徹底し、教室換気を行った。

「海星子育てひろば」・生涯学習講座の実施により、新型コロナウイルス感染拡大防止への対応・対策を徹底することで、継続した社会連携・社会貢献も可能となることがわかった。

A 【改善策】

新型コロナウイルス感染拡大防止への対応・対策を徹底することで、公開講座や生涯学習講座を次年度以降も開催に向けて調整していく。そのことで、より安全な社会連携・社会貢献を可能にしていく。検温を参加者・講演者ともに行い、手指の消毒とマスク着用を徹底する。参加は予約制とし、会場は、密を避けるため、定員を減らした上で、広い教室を用意し、窓は全開とする。備品は毎回消毒を行う。

また、講座開催に向け、次の変更を行う。公開講座は、参加者も多く、迅速な対応が求められるため、2022年度から講師を外部依頼から学内依頼へと変更する。

生涯学習講座では、来年度も定員を20名から15名に減らし、開講講座の数を増やすことで対応していく。具体的には、生涯学習講座では、語学講座に加え、観光系講座を3講座から4講座に増やす。2023年度までには、語学系講座も含めて12講座開講を目指し、大学の地域開放を進めていく。

12. 英語観光学科

P【目標】基準4-④

コロナ禍においてオンラインを活用した授業の質を高め、フィールドワークやゼミを通じて課題解決能力を修得させる機会を設ける。また英語のカリキュラムを強化し、TOEICの必要性を周知すると共に英語で発表できる機会を設ける。

D【現状説明】

コロナ禍において目標を達成するために様々な取り組みを行った。以下に本年度の取組について説明する。

① 2021年度兵庫観光本部の「誘客・周遊の中核となる観光地独自の魅力づくり支援事業」における神河町観光協会からの業務委託。

観光客への非接触型のスマホARを使っての観光名所、施設の紹介を動画で配信する計画を神河町観光協会が兵庫観光本部に事業提案を行い採択された。この事業において本学3年次の観光系ゼミにおいて、神河町の観光地における動画撮影に協力した。ゼミ生4名が神河町の観光名所8か所で観光PR動画の撮影を行い、神河町道の駅で販売されているお弁当やお菓子などの食レポ撮影やそれぞれの観光地におけるPRコメントを学生自身が作成し、動画にも出演した。9月に動画が完成し、神河町を訪れた観光客に紹介されている。

② 記事投稿

社会と繋がることをテーマに、「日本語表現法」(1年次・必修)、「日本語文章構成法」(2年次・選択)の授業においてさまざまな媒体への投稿を課している。なお、これらの科目は共通科目であるが、必修科目の「日本語表現法」は学科別に行われた。

③ 海外旅行企画

2年次の「海星学」の時間を利用して、グループに分かれて海外旅行企画を行った。海外旅行企画に関しては関空発着のスケジュールでテーマを考え、日程表を作成し各都市での観光施設や宿泊先、食事などを調査し、最終的にパワーポイントでまとめる内容である。

④ 観光ゼミでのフィールドワーク

a)姫路市及び家島における観光調査

瀬戸内海の家島に行き、観光地の調査と地元の方へのインタビューを行った。また姫路市内の観光地を訪問し、観光・体験・食のグループに分かれ調査を行った。また姫路城では観光客の動向調査を実施した。

b)古民家再生 NIPPONIA 竹原の調査

広島県竹原にある NIPPONIA の運営者から古民家再生の経緯とビジネスの現状を聞き、施設見学、地域の観光事業者の意識調査及び観光客の意識調査を行った。

c)ユニバーサルデザイン調査

神戸空港、姫路城において障害者種別による利用者導線の理解を目的に現地調査を行った。また地方行政の障害者と LGBT への取組を理解するために兵庫県庁へ訪問し、観光客の多い京都で歴史的な建造物のユニバーサルデザインの取組について調査するために京都市に訪問した。また神戸ツーリズムセンター、国立民族博物館、姫路 LGBT 交流会「そらひめじ」にも訪問を行った。

⑤ 英語のカリキュラム強化

2022 年度カリキュラムにおいて TOEIC 講義を増やし、学生に TOEIC の必要性を周知してスコアアップを目指す。既存講義の「観光英検①②」を廃止し「TOEIC 入門①②」を必修科目にし、また 3 年次生配当選択科目として「TOEICⅢ・Ⅳ」を新設した。

コア・イングリッシュの一つである Reading の多読教材を用いた授業に変更し、英語での読書に慣れる機会を設けた。

C【点検・評価】

① 兵庫県神河町「誘客・周遊の中核となる観光地独自の魅力づくり支援事業」

学生が地域の魅力を伝える事業に直接関わることができたことは非常に良い経験になった。神河町の観光施設の方々や観光協会のスタッフの方と観光地のPRの仕方について事前に打ち合わせを行い、何度も台本を練り直し動画作成に注力した成果として完成した動画は学生達にとって大きな自信になった。また本学と神河町の観光における事業連携としての継続性とフィールドワークを通じてのPBL型学修を実施することができた。

② 記事投稿

今年度は、いくつかの投稿の中から、一般社団法人言の葉協会主催「第 12 回言の葉大賞」において、2 万点を超える応募の中から「道」をテーマにした作文で本学は「学校賞」が授与された。一つのテーマに沿って自らの考えを文章にすることは、思考力や表現力を養うことに繋がり、コミュニケーション能力が向上すると考える。

③ 海外旅行企画

各チームで作成したパワーポイントを 2 年次生全員の前で発表する機会を設けた。その中で優秀作品 3 チームを選抜し、「第 11 回 KAISEI English and Tourism Festival」に

おいて発表を行った。またこの3チームは日本旅行業協会関西支部が主催する「関空発学生がつくる海外旅行企画コンテスト」(観光庁後援)に応募した。

選考の結果、本選に進出すると旅行会社のアドバイスを受け最終選考に進出できる。

昨年は本学の1チームが本選出場を果たし、「優秀賞」を獲得した。

④ 観光ゼミでのフィールドワーク

- a) 家島の観光について事前調査を行い、実際の街の様子を見学し、地域の人たちと交流することで本当の地域の課題を理解することができた。また姫路城における観光客動向調査を100名の観光客に行い、調査結果をまとめた。
- b) ゼミ生の活発な質問があり、かなり内容の濃いレクチャーとなった。施設は江戸時代の街並みの中に点在する3ヶ所有り、各宿泊棟を見学し、街並み保存地区で事業者並び観光客にアンケートを実施。アンケートは古民家再生宿泊施設の認知、観光関連の質問を行った。
- c) 学生たちはユニバーサルデザインに関して、交通機関や観光施設などで実際の導線を知ることができより理解を深めることができた。また共生社会への心のバリアフリーの重要性を理解でき、研究課題の発掘に繋がった。

上記取組の内、(a)(b)については、1月に実施した学科の成果発表会である「第11回 KAISEI English and Tourism Festival」において成果報告発表を行った。参加学生からのアンケート調査では、各発表に対する学生の関心の高さを伺い知ることができた。

⑤ 英語カリキュラムの強化

TOEIC受験者は2022年1月実施において52名であり、前年同月比で84%と減少した。また平均スコアは455.3点と前年同月比でマイナス19.4点であった。但し、同じ学生の比較では今回の平均スコアが500.5点と前年同月比で55点上がっている。データの正確性を保つためにも学科全員の受験が望まれる。

多読では、ほぼ全員が前学期よりも読書語数を超えることができている。前週に4冊の多読図書読書を課題とし、授業ではそれらについての読解問題を行ったところ、58点中平均点が37点と64%に達することができた。またWriting力が向上した。

A【改善策】

コロナ禍においても多くのフィールドワークが実施されPBL型学修を行い、学生たちが地域の課題や問題点を発掘し、解決策を見出すことができた。今回の取組については学外と連携したも

のも多く、学生たちの思考力や表現力、そしてコミュニケーション力を養うことができたと考える。また英語力の向上においては次年度へのカリキュラム再編による TOEIC 講義の強化、また多読などの基礎力の強化を行うことができた。コロナ禍において例年、必修としている TOEIC の学内受験も希望者としたことから学生の成長度を測る正確なスコア比較を行うことはできなかった。次年度は必修としてスコアの実績比較を行いたい。

コロナ禍において対面授業ができない期間は、オンラインを活用した取り組みを各教員が Google Classroom やオンラインツールを利用し、工夫を行い学生の授業への満足度を高めるよう努力した。各教員間でのオンライン授業についてのFD研修などを開催し、更に質の高いオンライン授業を提供できるよう努めていきたい。

13. 心理こども学科

P【目標】基準 4-④

学生の学修を活性化し、主体的参加を促す授業内容や授業方法を工夫する。授業アンケートや学修の振り返り等を通して学生の実態をとらえ、改善を図る。

D【現状説明】

学科の自己点検報告時の現状説明として、毎年 1 年次生を対象にした取得したい免許状や資格について示している。

	2018(39名)	2019(35名)	2020(37名)	2021(40名)
保育士	37(94.8%)	23(65.7%)	24(64.6%)	28(70%)
幼稚園教諭	35(89.7%)	28(80%)	27(73.0%)	31(77.5%)
小学校教諭	11(28.2%)	10(28.6%)	10→8	8(20%)
認定心理士	23(59%)	24(68.6%)	24→5	21(52.5%)
公認心理師		1(2.8%)	6→14	6(15%)

2018 年度～2020 年度は、前学科主任が 4 月に実施していた結果で、2020 年度の→後の数字と 2021 年度は、基礎演習で 12 月に実施したアンケート結果である。数値は、複数回答である。この表では示すことができないが、主流である保育士・幼稚園教諭を目指す学生は、保育士と幼稚園教諭の両方の資格・免許の取得を希望している。小学校教諭を目指す学生は小学校教員免許の単一取得の希望であることが特徴だが、保幼小 3 つの資格・免許を希望する学生が 2021 年度は 2 名いる。公認心理師を選択した学生は認定心理士と重なっている。保幼小の資格・免許の取得を目指さず、心理士のみを見据えている学生は、2 名である。

そして、2018 年度調査対象の学生が、今年卒業を迎える。実際に免許を取得した数は、保育士 20、幼稚園教諭 21、小学校が 10、認定心理士が 13 である。入学時の志を貫き、4 年間目標に向かって励み続けることは、決して簡単な事ではない。そのため教員は、科目の特性を活かし、学生が意欲的に授業で学べるよう、今年度も様々な工夫・取り組みを行った。

C【点検・評価】

学生の実態を把握し、授業内容や授業方法の改善を図るために、各教員が担当科目の中から 1 科目を選択し、アンケートを実施し、各科目についての【現状説明】【点検・評価】【改善策】を記述する。

- (1)1年次春学期「科目A」担当A
- (2)1年次秋学期「科目B」担当B
- (3)1年次秋学期「科目C」担当C
- (4)2年次秋学期「科目D」担当D
- (5)2年次秋学期「科目E」担当E
- (6)3年次春学期「科目F」担当F

(7)3年次秋学期「科目G」担当G

(8)3年次秋学期「科目H」担当H

(1)1年次春学期「科目A」担当A

D[現状説明]

「科目A」は1年次対象で、本学でこれから学ぶ様々な心理学研究の領域について概観する講義である。認定心理士・公認心理師資格以外に情報処理士の資格に必要な科目でもあるため、両学科からの受講者が多く、50名から80名の大きなクラスとなる。「授業改善のための中間アンケート」はオンライン授業中の第8回目での実施であった。後半はハイブリッド授業となった。2回の授業アンケートのうち、初回はGoogleフォームでの実施だったため、回収率が8割程度となった。2回目は最終講義で実施した。

アンケートの結果を以下にまとめる。

表1)2021年度「科目A」

1. 講義についてお尋ねします

全受講者 50名	初回調査 第8回(41名) 6月4日金曜日 5時間目	2回目調査 第15回(47名) 7月30日金曜日 5時間目
① 授業の進め方	1. ちょうどよい(87.8%) 2. 速い(9.8%) 3. 遅い(2.4%)	1. ちょうどよい(87.2%) 2. 速い(12.8%) 3. 遅い(0%)
② 教材・資料	1. わかりやすい(41.5%) 2. 問題ない(53.7%) 3. わかりにくい(4.9%)	1. わかりやすい(48.9%) 2. 問題ない(51.1%) 3. わかりにくい(0%)
③ 教員の説明	1. わかりやすい(82.5%) 2. 問題ない(17.5%) 3. わかりにくい(0%)	1. わかりやすい(83%) 2. 問題ない(17%) 3. わかりにくい(0%)
④ 授業のまとめ レジュメ記入 資料整理	1. 出来ている(56.1%) 2. 抜けがある(31.7%) 3. 出来ていない(12.2%)	1. 出来ている(53.2%) 2. 抜けがある(38.4%) 3. 出来ていない(6.4%)

2. 授業の感想・質問・リクエスト(自由記述)

①初回調査

(リモート授業の課題) *テキストを音読する時間はいらないのでは?(冒頭の出席確認中テキスト音読させる)*リモートになってからついていくてません(リモートの)電波の調子以外なんの問題もありません、早く対面になってほしい、たまにスライドが見えづらいことがある。*赤字プリント(レジュメ記入箇所の正解を示したもの)があります(3)毎回ほしい*パワポをすべてノートに写すべきですか?パワポの赤字はすべてメモ?(3)*プリントのどこに書いてよいかわからないことがある。もうすこしゆっくり進めてほしい*pdfでほしい

(教材について)*もうすこしメモスペース(授業レジュメ)を広く、*パワポプリントが欲しい
*映像、解説の絵、図でわかりやすい(4)*心理テストが楽しいです、クイズで復習できる

(授業の感想・質問について) * 心理学は難しそうで心配だったが、話が面白くわかりやすいので授業楽しい、今まで知らなかつたことを知れるので、楽しみ(13) * 暗記・錯覚の実験は実際に体験できるので気づきがあった、実験楽しい(3) * 期末試験が不安(3) * 困ったらすぐに先生に聞きに行く。* 金曜 5 時間目は大変だがこの授業が癒し(3) * 丁寧な対応嬉しい。* 生徒さんへの温かいきめ細やかな対応は素晴らしいです(社会人の方) * 発達心理学が、将来の子ども支援の参考になる等。

②第2回目調査

(リモート授業の課題) 無し

(教材について) * プリントの空白を大きくして * テスト予想より難しかった * 文字を書くことが多かった、そうだったのかといろんなことが知れてよかったです。* 映像資料がよかったです。例をあげてもらい、わかりやすかったです(4) * 記憶の実験、ためになり、楽しかった(3) * 錯覚・性格診断、面白かったです(5)

(授業の感想・質問) * 心理学、最近のものと知って驚きました * 自分はネガティブ思考だが、考え方によって楽になると知って楽しかった。学んだことを生かしていきたいです * 授業楽しかったです、心理学理解できました。ありがとうございました(9) * 心理学、自分の恋愛にも活かしたいです

* 難しいだろうと思っていて、難しかったですが、面白かったです(5) 他者理解のためにまずは自分の心に向き合い理解することが大切だと思った * 金曜 5 時間目だったが、癒していました。今後も楽しみ(7)

* 身近な具体例で解説がわかりやすかったです(3)

C[点検・評価]

<長所・特徴>

今年度最も良かった点は、大人数のクラスなのでいつもなら私語が問題になるのだが、今年度はコロナ対策で間隔をあけての座席固定でスペースがあつたため、私語への苦情が全くでなかつたことである。今後も、可能な限り引き続きこの方法を維持したい。

また、本講義では、居眠り対策でパワポレジュメの配布は行わず、パワポ画面に重要なポイントを赤字で提示して、ノートをとるためのレジュメに書き写させている。ただ、リモートだと、授業後に質問等しづらいため、昨年度から、ノートをとるべき内容を赤字で示した赤字プリントを提示して、自分のノートと見比べて、大事なところのメモが取れているか確認させるようにしている。この方法だと、ノートの取り損ねや書き損じの間違いがあつてもても、後で確認できるので受講生に大変好評である。これも配布は行わず、授業中のランダムなタイミングで提示するため、ちゃんと授業に集中していなければ利用できない。これにより、授業への集中度を高めるきっかけにもなっている。

心理学は高校までは科目としてはないところがほとんどなため、興味を持って受講する学生が多い。内容は難解ながらも、全ての内容が自分の心に何らかの関連があるため、興味を持つもらえるために具体的な例示や映像資料の提示を行い、実験や検査等体験できるようにした。その結果、学生が楽しみながら授業に参加出来ていたようである。8回目のタイミングでのアンケートで、学生の困っている事に後半の授業で対応できたので、表1の②教材・資料の困り感は解消しており、④授業のまとめやレジュメ記入、資料整理についても、出来ていない学生は初回の半数まで減っている。

<問題点>

毎回、「次に進んでよいか」と確認はしているが、それでも1割の学生は、初回、2回目で、授業の進め方が速いと感じているようであった。挙手して「待った」の意思表示をする学生もいるが、言えない方のことを考えて、更なる工夫が必要である。

また、表1より、②「教材・資料」は、困っている学生は第2回調査では0%だったが、「1. わかりやすい」と回答した学生は半数に留まっている。内容自体が難解なのと、パワポファイルの配布を行わないため仕方がないのだが、「1. わかりやすい」に学生が何を求めているのかを理解することが今後の課題であろう。ノートをとるためのレジュメの空欄スペースが狭い、と訴える学生がいた。ルーズリーフやノートに写してもよいのだが、このプリントに書かなければならぬと思いつぶやくしている節がある。

そして、配布資料の整理や授業のまとめについては、最終授業においても「2. 抜けがある」と回答した学生が4割弱もいた。初回の「3. 出来ていない」学生が、努力して「2. ぬけがある」に移行した印象がある。授業レジュメの管理や毎回の振り返りについて、後回しにしない工夫が必要である。対面授業だと欠席しても次の回で資料をもらえるが、リモート期間はメール添付やクラスルームに資料をアップしても、印刷が間に合わずそのままになっていた学生も多かったかもしれない。

A[改善策]

問題点を上記に3点あげたが、まず1点目の板書スピードの問題は、引き続き、フロアの様子を確認しながら行うこととする。初回授業で遠慮なく手を挙げて意思表明するように説明をする。また、初回授業で、質問カードを配布して、授業中になかなか手を上げにくい場合の補助ツールとして用いてもらう。

2点目、表1の②「教材・資料」のわかりやすさを改善するために、次年度のアンケートには、「こうだったらいいのに」「こうしてほしい」と具体的に記述する欄を設けたい。今回の調査の結果、出てきた、レジュメの空欄スペースの問題については、初回授業で、ルーズリーフやノートの利用も可能で、必ずしもレジュメに書かなければならないことはないと説明を加えることとする。

3点目、配布資料の管理については、対面時は欠席しても次の授業で配布はしていたが、オンライン授業中は自己管理になるため、自宅にプリンターがない学生はコンビニまで行って印刷している場合もあると聞いている。うっかり印刷しそびれてそのままになってしまっていた学生もいたかもしれない。大学の図書館に印刷の設備があることや、学習支援室 Stella で資料整理を手伝ってもらえることなどをこれも初回の授業で学生に伝えて、少しでも学生の負担を少なくできれば、と考える。

(2)1年次秋学期「科目B」担当B

D[現状説明]

- ・コロナ感染症流行により、毎年行っていた実際体験としての保育所訪問ができないということもあって、昨年同様、できるだけ理解しやすいようにDVD視聴を多く取り入れて、実際乳児の姿を目にする機会を増やすようにした。

- ・昨年の反省をもとに、パワーポイントでの授業が分かり易かったので、今回もパワーポイントとプリントを毎回作り大切な事柄を記入方式にした。
- ・上記のことを踏まえながらその改善に努められるよう、11月と1月の2回アンケートを実施した。
- ・評価対象科目は『科目B』、評価対象学年は(1年次生32名、2年次生1名)秋学期実施。

C[点検・評価]

<アンケートの実施>

11月と1月に、授業アンケートを実施した。結果は次のとおりである。

1.『科目B』の授業の内容は、理解できましたか？

	11月(授業中間 29人)	1月(授業終了時 27人)
ア. 良く理解できた	25人(86%)	15人(56%)
イ.どちらかというと理解できた	4人(14%)	12人(44%)
ウ.どちらかというと理解できなかつた	0人	0人
エ. 理解できなかつた	0人	0人

2.授業の進め方で、話し方や説明の仕方は、わかりやすかったです？

	11月(授業中間 29人)	1月(授業終了時 27人)
ア. わかりやすかったです	6人(90%)	24人(89%)
イ.どちらかというとわかりやすかったです	3人(10%)	3人(11%)
ウ.どちらかというとわかりにくかったです	0人	0人
エ. わかりにくかったです	0人	0人

3.パワーポイント、DVD視聴、事例などが授業理解につながっていますか？

	11月(授業中間 29人)	1月(授業終了時 27人)
ア. 繋がっている	29人(100%)	26人(96%)
イ.どちらかというと繋がっている	0人	1人(4%)
ウ.どちらかというと繋がっていない	0人	0人
エ.全然関係ない	0人	0人

<アンケートの考察>

⑦ 授業の理解度については、1月の理解度が少なくなっているが、どちらかというと理解できているというのも含めると11月も1月も100%理解できているとなっている。1月の方が理解度の数値が低いのは、内容的に覚えなくてはいけないものもたくさん出てきているからであろうと思われる。

理解度100%の要因としては、毎回の授業時に、振り返りの時間を取りっていたこと

や、パワーポイントとプリントを連動させて、大事なところを記入するようにしたことで、話を聞く姿勢もできたからであると考えられる。また、DVD視聴、事例の出し方についても、説明の後つなげて実際の映像を見ることで、話と連動できたのではと思われる。今回この結果が試験にも表れていてよくできていた。

授業の進め方については、事例を多く取り入れたり、保育現場の映像を見せたりしたことと、大切なところは強調して話をしたりしたことが、授業が分かり易く、理解につながったとされる。特にDVD視聴については、話と連動していく分かり易かったようだ。

① 授業全般についての感想、要望については下記のような意見があった。

- ・乳児のことをたくさん知ることができた。
- ・将来に役立つことだった。
- ・子どもの発達過程をしっかり学べた。
- ・赤ちゃんの喜ぶあそびやかかわり方など実践的なことが学べた。
- ・DVD視聴で、赤ちゃんの可愛さがよくわかり、乳児への興味関心が増した。
- ・DVD視聴や事例での説明がとても分かりやすかった。
- ・授業が分かり易く、楽しかった。
- ・プリントが分かりやすかった。

<長所・特色>

⑦ 今回もコロナ禍で、実際保育現場に行き乳児とかかわる経験ができなかつたが、その代わりに話したこととリンクする内容のDVDを選び見せたことや、できるだけ保育現場での事例を取り入れて話したことが学びに繋がったと思われる。

① 毎回振り返りを行い、質問に答えてもらう時間を設けたり、小テストをしたりして、学んだことが定着するようにした。

⑦ いつオンライン授業になつてもいいように、パワーポイントとプリントを作つて授業を進めたことが、書くことが多いが学びに繋がつていると実感する。

<問題点>

⑦ 最後の定期試験が、70%を占めるので、その時に、一生懸命覚えて、試験の成績は何とか合格点をとれるが、実際どこまで身についているか分からぬところはある。振り返りの小テストをその都度していくことが理解度を増すと考えられるので、実施したいが、15回の授業の中に組み入れるのはなかなか難しい。

① 予習・復習をどのようにするかの話もしているが、実際している学生は少ないと思われる。宿題としてさせないと、自分ではなかなか特に復習ができない。

A[改善策]

⑦ 実際に保育所現場を見ることやDVD視聴、事例をあげることにより、乳児のかわいらしさをどう伝え、楽しく保育ができるようにしていくか、コロナ感染症のこともあるので、保育現場に行けないことを想定してのやり方を考えていく必要がある。

① 準備学習や復習がほとんど学生任せではできていないため、毎回授業の振り返りの時間だけではなく、確認テストを組み入れて、予習復習をしっかりし、理解度を増すようにする。

(3) 1年次秋学期「科目C」担当C

D[現状説明]

音楽の授業は、新型コロナウイルス感染症の影響を最も大きく受けている授業の一つであると言える。音楽の授業では、「大きな声」や「吐く息」と切り離して進めることはできない。2020年度から試用したオンライン授業において、環境が整っている学生の場合は、個人が個室で歌を歌えるというような利点も多々ある。が一方、IT機器を挟むと、音を発する側と受け取る側には必ず時間差が生じ、音を同時に享受し合うことができない。また電波の状況によっては、演奏した音のテンポが変様する。2021年秋学期は対面授業が中心だったが、発声練習や合唱などかなりの制約があった。特に、授業計画に組み込まれていた2点の事項について懸念があった。1点目は、連弾演習である。連弾で友人と音を重ねることは、自身固有のリズム感に気づきがあったり、個人で得られる以上の達成感や音楽を演奏する喜びを味わうことができる。しかし、同じ楽器を共有し、顔の位置が非常に近くなる等、コロナ渦ならではの問題がある。2点目は、2020年度は見送らざるを得なかった海星☆音楽フェスティバルの実施である。昨年、年度末のピアノのテストを実施した際に、発表の場を準備できなかったことに非常に悔いが残った。海星☆音楽フェスティバルは、音楽の技術習得だけでなく、総合的な学びを体験できる場所であることは間違いない。

しかし今年は、合唱ができないなら個人で、一定の距離を保つためには個に分散、連弾はピアノ2台を使用するなど創意工夫し、できることをできる形で実施しようと決意した。密を避けるための練習場所の確保や、相手や仲間にに対する気配りは例年以上に強いられたが、IT機器を駆使し、年度の集大成である海星☆音楽フェスティバル実施を実現した。テスト期間中はオンラインになったため、練習や打ち合わせにさえ十分な時間が取れなかつたが、それでも動画撮影に臨んだ。その熱い思いが学生にも伝わったためか、アンケートには、授業に対する批判的な記載はほとんどなかった。授業に対し肯定的な学生だけがアンケートを回答した可能性も考えられる。

C[点検・評価]

<アンケートの実施>

2月中旬、Googleを用いて実施。回答者数23人(対象者36名、64%)

1. 初等音楽を受講して、ピアノの技術が上達したと感じていますか？

とても上達した 37.5%	少し上達した 62.5%
---------------	--------------

2. 楽譜を読む力やコードの理解力は向上しましたか？

とても向上した 54.2%	少し向上した 45.8%
---------------	--------------

3. これから受講する初等音楽3・4に対する意欲はありますか？

大きいにある 33.3%	少しある 54.2%	あまりない 12.5%(3名)
--------------	------------	-----------------

4. 初等音楽を担当した二人の教員の整合性はとれていましたか？

とてもとれていた 45.5%	どちらかといえばとれていた 54.5%
----------------	---------------------

5. 授業に対する自由記述

- ・技術面でも、知識面でも、一人一人に合った指導をしていただくことができ、有意義な時間でした。必ず将来に生きるような具体的な教えを頂き、とても勉強になりました。
- ・とにかく一人一人に手厚く、自分のペースに合わせて指導していただけたのが良かった。
- ・授業の時間配分が上手くいかない時もあり、見てもらう順番が最後のほうだと、急いだ感じだったり見てもらう時間が短かったように思いました。

6. 海星☆音楽フェスティバルに対する自由記述

- ・音楽会での演奏は受け手の表情が感じることが出来ず、寂しいものでしたが、今年は開催できたということで、悔しい気持ちは全くありません。むしろ、オンラインでの会にもメリットを多く感じました。
- ・今できることは一生懸命できたと思っているのでよかったです。
- ・普段聞くことのない、他のクラスの方のピアノや、その他の楽器を画面を通してですが見てみてとても素敵だなと思いました。

<長所・短所>

1～3の学生自身の技術の向上や音楽の学びに対しては、十分な満足が得られた。4に関しては、2年前の自己点検においての改善点であったが、今回整合性が取れている結果が得られ、安堵の思いである。5は、「一人ひとり」「自分のペース」というキーワードが数多くあった。一方、時間配分に対する意見が2件あり、筆者自身も自覚している反省点である。6は、オンライン配信ではあったが、開催したことによる感想の記述ばかりであった。動画編集に長けている学生も存在し、学生の今を動画に収めることができたと評価している。

<問題点>

「科目 C」の授業は、個人レッスンの時間を設定しており、学生と個人で向き合う。進度や取り組み方は個人によって異なるが、分け隔てなく平等に接する必要性が求められる。学生一人ひとりの思いを察知し、真摯に向き合い、丁寧に時間を共有する姿勢が大切である。そして、学生に対する熱い指導がオーバーヒート、あるいは独善的になりすぎないように気をつけたい。

A[改善点]

コロナが終息するまでは、音楽に対する制約は非常に多い。気持ちもネガティブになりがちであるが、学生が意欲的にピアノ技術の向上や音楽全般に亘る知識の修得に取り組むために、今求められていること、今必要なことを察知し、授業を進めていきたい。さらに新しい生活様式に対応するために、さらなる活用と需要が見込まれる IT 機器の取り扱いも熟達していきたい。

(4) 2年次秋学期「科目D」担当D

D[現状説明]

この授業は、「人の行動が変化する過程」「言語の習得における機序」を学ぶ、公認心理師科目である。学習心理学と人の言葉の獲得、発達などについて学ぶ授業である。基本的にパワーポイントのスライドとレジュメを使用して、授業を進めた。また、新型コロナ感染予防対策で座席

を指定し、間隔を開けて着席させた。授業中は必ずマスクを着用し、換気をしながら授業を行った。希望し、大学に認められた数人は Zoom を用いて、遠隔で授業に参加したが、基本的には対面授業で行った。

この授業では、対面授業で2回アンケートを行った。1回目は 2021 年 11 月 17 日(水)、2回目は 2022 年 1 月 12 日(水)に実施した。

C〔点検・評価〕

<アンケート結果>

1.授業の内容について、分かりやすかったですか？

	11 月(回答者数 24 人)	1月(回答者数 25 人)
分かりやすかった	12人	9人
どちらかというと分かりやすかった	10人	15人
どちらかというと分かりにくかった	2人	1人
分かりにくかった	0人	0人

2.授業の説明の仕方や話し方は、分かりやすかったですか？

	11 月(回答者数 24 人)	1月(回答者数 25 人)
とても分かりやすかった	13人	9人
どちらかというと分かりやすかった	10人	14人
どちらかというと分かりにくかった	1人	2人
分かりにくかった	0人	0人

3.パワーポイントのスライドの文字やスライドの速さは、見やすかったですか？

	11 月(回答者数 24 人)	1月(回答者数 25 人)
文字の大きさも速さも丁度よい	24人	25人
文字を大きくしてほしい	0人	0人
スライドの速さをゆっくりしてほしい	0人	0人
文字を大きくして、スライドの速さをゆっくりしてほしい	0人	0人

<アンケート自由記述欄>

① 第1回目のアンケート

・子どものことを知ることが出来て、いい勉強になった。

・以前に習ったことを深められた。(2)

- ・赤ちゃんに絵本など、様々なことに対して、楽しさや面白さを感じてもらうことが大切だと思った。
- ・具体例や補足説明があり、分かりやすい。(5)
- ・言葉の仕組みを学ぶのが楽しい。
- ・パワーポイントがイラストつきで、各項目に内容が分かれていて見やすい。
- ・子どものことが学べるので、ありがたい。
- ・ポイントに線を引くように言ってくれるので、重要なところが分かりやすい。
- ・初めて知った内容が多かったので、面白かった。
- ・レジュメを配布するので、復習しやすい。(2)
- ・この授業で学んだことを活かして、子どもに関わりたい。

② 第2回目のアンケート

- ・具体例が多くて分かりやすい。(3)
- ・スライドが分かりやすい、イラストつきで、イメージしやすい。(3)
- ・分かりやすい授業。(3)
- ・なんとなく使っていた言葉や小さい頃にしていたこと全てが成長のために必要な行動、言動だったと分かった。
- ・子どもとの関り方について考える良い時間になった。
- ・新しい知識を学ぶことが出来て良かった。(2)
- ・レジュメがあるので、復習しやすい。
- ・子どもがどのように言葉を学んでいるか分かった。
- ・教科書どおりに進むので、流れがつかみやすい。
- ・子どもの支援の仕方が深く学べて良かった。
- ・子どもの言語習得に関して研究しているので、子どもの特徴を知ることができて、良かった。卒業後は子どもと関わる仕事をするので、これまでの知識をもとに、子どもと関わりたい。

<長所・特色>

Ⓐ 子どもと関わる仕事を目指す学生が多く、子どもの言葉の発達について学ぶことで、子どもとの関わり方などを考える機会になっている。

Ⓑ 子どもの言葉の発達における具体例を紹介している。具体例があることで、授業の内容がつかみやすくなっている。

Ⓒ スライドはイラストをつけ、教科書のポイントとなることを中心に整理して示している。イラストがあることで、イメージしやすくなっている。また、レジュメを配布して授業を行った。レジュメでポイントを確認しやすく、復習に役立っている。

<問題点>

Ⓓ 初めて学習心理学、言葉の発達を学ぶ学生が多いので、具体例などを交えて、より丁寧に言葉の発達の流れが分かるように説明する。

Ⓔ 専門知識と実際の子どもの様子などの具体例がどのように結びつくのかを具体的に伝える。

Ⓕ スライドやレジュメを見て、理解を深めている学生が多いので、より分かりやすいスライド、レ

ジュメづくりを引き続き行う。

A〔改善策〕

今後の授業に活かすべく、改善策を考察した。この授業で初めて、子どもの言葉の発達について学ぶ学生も多い。また、子どもに関わる仕事に興味を持っている学生も多い。子どもの言葉の発達を専門的に学ぶことで、子どもとどのように関わるかを振り返っている学生もいる。発達的な専門知識を学んだうえで、子どもと関わることは重要である。そのため、子どもの言葉がどのように発達するか、その流れをより丁寧に伝える、専門知識と実際の子どもの様子が結びつけられるように具体例を伝える、更に分かりやすいスライドやレジュメを作成するなどの改善点が考えられる。

(5)2年次秋学期「科目E」担当E

D〔現状説明〕

教育方法の範疇は幅広く、課程論、概論、原理とも重なる部分もある。履修者は保育・幼稚園・小学校教職を希望するものが受講している。学生にとっては、親しみににくい学問分野かもしれない。そのため、少しでも興味関心を高めるために、事例を多く採り入れるとともに、書くこと、復習課題を大切にしながら授業を進めた。今年度は第6波を予想して、普段からレポート課題や授業中での双方向の意見交換を重視して評価した。

C アンケートを実施することで傾向を知る。

<アンケート>※中間期 11月、N=34

○授業内容について

(1)11月の設問 説明はわかりますか。

(要望により、復習課題を数回)パワーポイントではなく、黒板授業も採り入れましたが、説明はわかりましたか。

アよくわかる イ何とかわかる ウあまりわからない エわからない(理解できない)

ア 11月29人 イ 11月5人

<学生より11月の意見>

○授業が金曜日の5時間目でしんどかったが、がんばっている。

○ホワイトボードが光って見にくい時がある。(AH 5時間目)

○事例が多いのはうれしいけど、シラバスすべてを網羅できるのでしょうか。

<1月の意見>

オンラインになったために、比較するためのアンケート調査ができなかった。

<長所・教科の特色>

毎年感じることではあるが、資格だけとすることを目的としている学生のレポートは、内容も薄く、一般論に終わっている。教育方法の内容は、心理学を多く採り入れているので、教職に生かせるとともに、将来の人生にも役立つことを願っている。

前半は特に学生の声を聴き合うことを重視し、マイクをその都度消毒しながら、アセンブリで各

自の席をまわり、個々人の意見を発表した後、コメントした。

30 数名全員が発言することは難しいが、答えが限定されない、自分の考えを認め、どれもまちがいではないといえるような質問をするようにした。

<問題点>

11月は記名のアンケートにもかかわらず、要望も含めて、かなりの学生が意見を書いていた。学年のカラーにもよるが、良い傾向だと言える反面、ありきたり的回答、「特性がある子どもへのかかわり方が分かった」など、具体に自分の言葉が少なかった。事例を核にして授業を進めてきたことについては、学生の意見も賛否両論で、シラバスの内容に軽重がついてしまったことは反省すべき点である。

(2)11月『教育・保育に心理学を！』を軸にして授業を進めています。

1月 アンケートなし

アよくわかる イ何とかわかる ウあまりわからない エわからない(理解できない)

ア 11月25人 イ 11月9人

<改善してほしいことがあれば書いてください>

<11月の意見>

○現場での授業の組み立て方を詳しく知りたい（小学校希望者）

○口頭で大切なことをお聞きするが、早いのでメモできない（事例は文書化しなかった）

<1月>なし

<長所・教科の特色>

昨年度は一方向の授業が多かったが今年は活発に議論できる場面もあり、学生が自分の考えを持つ良い機会となった。書き込み資料として与えたパワーポイント3段配布資料が、真っ黒になるまで視写、聴写、自分の考えに分けて書かせた。途中でペンが止まってしまう学生も見受けられたが、教育方法論の基礎としての知識を定着させるためには、書かせることは、効果があったと考える。

<問題点>

学生の中には、視覚優位の学生がいることを何度も失念してしまい、後で課題レポート内容をメールで送るようなこともあった。様々な学生がいることを意識していきたい。

A[全体のまとめ]

今、教育界で求められているのは、「自分の考えをまず持つ」ということ。そこで、毎回、全員に一言話せるよう授業を構成した。その中で、仲間の新鮮な感覚に触れた学生もいたことは一つの収穫ともいえる。

アンケート結果より、今回も昨年に引き続き、「書くこと」を重視して進めた。学年のカラーもあるだろうが、今年は反応もよく、質問も多く出た。指名されることに慣れていけば、双方向のやり取りができる、より授業内容が深まるんだろう。

教育方法論も日進月歩、激変する社会の中で動いていく。学生には、わたしが、学校園で得てきた新しい事例や課題を紹介しながら授業を進めていきたい。

(6) 3年次春学期「科目F」担当F

D [現状説明]

- ・幼免許の取得に向け、2年次の教育実習後、自身の課題を踏まえて臨む科目である。
- ・15回の授業のうち、4月下旬から6月初旬の計6回がオンライン授業となった。
- ・幼稚期の教育として重要視されている小学校教育との接続、安全教育、四季や行事を取り入れた園生活などを理解できるように、指導計画の提示や保育場面の映像等の実践事例を組み込んで授業を進めた。
- ・幼稚園教育要領の熟考を基盤として、教材研究・教材作成・指導案作成・模擬保育の実施という一連の過程を通して、実践的指導力を育むよう授業を進めた。

C [点検・評価]

<授業アンケートの実施>

6/9(8回目の授業日) 21名・回収率 100%

8/4(15回目の授業日) 20名・回収率 95%

		6/9(8回目の授業時) ⇒ 8/4(15回目の授業時)			
		できている	ほぼできている	あまりできていない	できていない
A	人学での学びも3年目となります。昨年を振り返り、幼稚教育についての専門的な知識や専門的指導技術は次第に身についてきましたか。	4 ⇒ 7	16 ⇒ 12	1 ⇒ 1	0
B	課題作成時において、幼稚教育・保育で使われる専門的な用語を覚え、使えるようになってきましたか。	1 ⇒ 4	16 ⇒ 15	4 ⇒ 1	0
C	課題作成を通して、自らの保育観について、考えることができましたか。	7 ⇒ 10	12 ⇒ 10	2 ⇒ 0	0
D	幼稚教育・保育における理論としての深みがあります。少しずつ教師の役割の重要性や教師としての責任の大ささを理解出来るようになっていますか。	8 ⇒ 15	13 ⇒ 5	0	0
E	これからのお子様や免許取得に向けて、この授業での成果を活かそうという気持ちでいますか。	14 ⇒ 18	7 ⇒ 2	0	0
F	子どもの発達を意識して保育を考えよう、教材を作ろうとする気持ちや姿勢が宿まれてきましたか。	9 ⇒ 12	10 ⇒ 8	2 ⇒ 0	0

<長所・特色>

- ①教材作成・指導案立案・模擬保育実施を一つの流れとして、実体験中心の授業回の中で、実践的な保育指導技術の獲得に向け、前向きな取組みと手応えを学生は感じている。
- ②9月の教育実習に向け、この授業での成果を活かそうという姿勢が感じられる。
- ③3年次生ともなると、子どもを身近に感じながら、幼稚園教員としてのやりがいを感じていることが推察される。

<問題点>

- ①5つの領域にかかる保育技術だけではなく、安全教育・小学校教育との接続、自然や行事活動など様々な視点から幼稚園生活を捉える必要性を感じ取ってはいるが、十分に理解しているとは言い難い。
- ②15回の授業に真面目に取り組んできたものの、例えば指導案を作成する力が不足していると感じた。その要因としては、幼児の発達を捉える力、教師の役割等について、十分に理解できていないからだと感じる。

A<全体のまとめ>

- ①教材作成・指導案作成・模擬保育の実施・振り返りに加えて、指導案を再作成するなどの授業改善を再度、熟考する。
- ②PPT等を使用して保育現場の実際や子どもの様子などにふれ、専門的な指導技術の向上に向け、更に授業改善を図る。

(7)3年次秋学期「科目G」担当G

D〔現状説明〕

この授業は、教職課程幼稚園教諭1種免許状取得のための必修科目である。内容は、幼児理解の意義と重要性を理解し、保育実践の事例などを通じて、幼児を多面的に理解する力を身に付けることや幼児の発達や生育環境など、幼児一人ひとりの実態に即した指導や、専門家を交えたチームでの対応方法、保護者的心情を理解した連携とカウンセリングマインドを基にした支援方法を理解することである。

授業方法として、レジュメを使用し、テキストや資料等を使い、授業の終わりにその日の講義の学びや感想等を「振り返りシート」に記入して提出することとした。事例検討の際は、まず、事例を読み個別での気づきや感想をグループディスカッション用のシートに記入し、その後、各グループでディスカッションを行い、発表を行った。(1名オンライン受講の学生がいたので、その学生にはオンライン上のチャットに書き込んでもらい、発表した。)全15回の講義のうち、14回までは対面授業を行い、新型コロナ感染拡大のため、最終講義のみオンラインで行った。この授業では対面授業時に2回アンケートを行った。1回目は、7回目の授業時(2021年11月12日)2回目は、14回目の授業時(2022年1月21日)に実施した。

C〔点検・評価〕

〈アンケート結果〉11月(中間時)の回答者 21人 1月(後半時)の回答者 18人

1. 授業の理解度について

わかりやすかった(11月 33% 1月 17%)だいたいわかった(11月 66% 1月 83%)
わかりにくかったはどちらも 0% だった。

2. 授業内容について

満足だ(11月 29% 1月 90%)11月では興味があるが 67% となっており、興味が持てない、不満足だという回答はどちらも 1% だった。

3. 授業の進め方について

ちょうどよい(11月 86% 1月 78%)速すぎる(11月 14% 1月 5%)

1月はもう少し速くてもよかったです 17%だった。

4. 授業のテキスト・資料や教材について

わかりやすかった(11月 29% 1月 28%)特に問題なかった(11月 77% 1月 78%)

わかりにくかったは共に 0%だった。

5. 事例検討のグループワークについて(複数回答あり)

色々な意見が聞けるので有意義だ(11月 71% 1月 72%)その他(11月 29% 1月 28%)

6. 振り返りシートについて

講義内容の整理に役立った(11月 38% 1月 39%)自分の考えをまとめることで気づきがあった(11月 38% 1月 28%)その他(11月 24% 1月 33%)

〈アンケートの考察〉

中間時のアンケート結果を分析すると、授業の理解は概ね理解できていると思われた。授業内容については、満足だと興味があると答えた学生がほとんどであった。しかし、授業の進め方については、速すぎるという意見もあった。授業のテキスト・資料や教材については、概ね問題はないようだった。

授業内で、事例検討等のグループワークを実施しており、概ね色々な意見が聞けるので有意義だという回答が多く見られたが、グループワークに戸惑いを感じている学生が少数ではあるがいた。授業の終わりに毎回振り返りシートを記入し提出しているが、振り返りシートについて、講義内容の整理や自分の考えをまとめることに役立てているという学生が多かったが、記入の仕方がわからないという学生も少数ではあるがいた。中間時のアンケート結果を受けて、授業の進め方では、少しうっくりと丁寧に講義を行うように心がけた。グループワークでは、グループ討議後に発表の場を設けて、履修学生に広く意見を知る機会を作り、フィードバックを行った。振り返りシートについては、書式を変更し、よりわかりやすいものとした。

後半時のアンケート結果を分析すると、授業の理解度については、「わかりやすかった」「だいたいわかった」と回答した学生が全員だったが、後半、「わかりやすかった」の回答人数が減ったのは、後半の授業内容が教育相談の部分が多く、保護者対応など、学生にとって理解しにくい内容だったからではないかと思われる。

〈長所・特色〉

① 履修時期が3年次後半ということもあり、教育・保育実習を終えた後では、特に保育現場で見てきたことや体験したこと等と授業内容が結びつくことが多い様子であった。授業の理解度が高いのはそのためだと思われる。

② 授業内容については、授業後半(14回目)では 90%の学生が満足しており、概ね理解度と合わせると授業内容を理解できたのではと推測される。振り返りシートの記入により、講義内容の整理を行ったり、自分の考えをまとめたりすることで理解が進んだのではないかと思われる。

③ 事例検討については、「色々な意見が聞けることが有意義だ」が 72%の結果がでているよ

うに、より深い学びにつながったと思われる。

<問題点>

- ① 事例検討のグループワークにおいて中間時で約 24%の学生がグループワークに対して不安を持っており、後半においても 22%の学生はグループワークがやりにくいという結果がでている。また、後半になってグループワークをやりたくないと感じていた学生が 17%と増加している。これは、新型コロナ感染拡大も影響していると思われる。実際、2022 年 1 月に入ってからの授業ではグループワークは中止し、各自の意見を記入してもらい、フィードバックを行うようにした。今後も、新型コロナの感染拡大時のグループワークについての実施方法を検討することが必要だと感じた。
- ② 振り返りシートは中間時に書式を変更したが、以前として記入の仕方がわからない学生が 28%おり、次年度に向けて、より記入しやすい書式への改善の必要性を感じた。学生に対して、自分の意見や考えをまとめて文章化することも求めていきたいので、工夫していきたい。>

A[改善策]

- ① グループワークの人数や回数について見直し、事例検討等をより深い学びにつなげるよう工夫していきたい。また、新型コロナ感染拡大等の社会状況に応じて、柔軟に対応したい。
- ② 振り返りシートについて、学生目線で記入しやすい書式に改善し、各学生の学びにつながるようにしていきたい。
- ③ グループでの発表等を積極的に取り入れ、学生のプレゼンテーション力につなげていきたい。
- ④ 保護者対応等学生が理解しにくいところは事例を用いてより具体的な説明を心がけたい。

(8)3年次秋学期「科目H」担当H

D[現状説明]

科目としては、本学のカリキュラムの変更措置があり2年ぶりの開講となった。新カリキュラムに対応した指導内容を厳選し、のちの指導法の演習 2 単位に直結するように、コアカリキュラムに沿って内容を編成している。ただし、専門的事項に関する指導が完全に分離できていないので、今年度はコアカリキュラムの指導法における(1)保育指導計画の立案、(2)模擬保育の実践、(3)反省と改善 に力を入れ、さらに幼稚園教育実習と保育所保育実習の本実習にいかす力量をつけることに重点を置いた。

評価割合は平常 50%・定期試験 50%である。

C[点検・評価]

<長所・特色>

- ①秋学期3年次生の幼保希望者は、9 月に3週間幼稚園、12 月に2週間保育所の本実習を行うことから、8月に1コマ前倒しして、幼稚園教育実習にいかせる内容を、そして指導案立案と

模擬保育・発表においては幼児用・乳児用の指導計画の立案と教材作成を行い実習担当教員と連携した。そのための資料作成もした。全15回分の資料配布は授業第1回目に行った。

②チャイルド・ビジョンを各自作成し、乳幼児の視野体験を前半に行うようにした。

③教材作成は、学生個々の熱意と工夫が表現されるため、意欲の向上には必須の内容と言える。今回は乳児用・幼児用の2種類の保育指導案作成とそれに基づくマグネットシアター教材作成を行った。授業における covid-19 予防の必要から模擬保育は取りやめ、発表形式で行った。保育指導案は学生の名前を伏せて全員に配布し保育実践にいかせる資料とした。(両実習担当教員に連絡済)

<問題点>

①3年次生で保育指導案の立案に自信のない学生が多い。保育指導案は、おおむね書き方にパターンがある。⑦幼児の生活(の流れと保育者の願い)⑦ねらい⑦内容もしくは本時の活動(体験の詳細)⑦環境構成(準備物)⑦予想される幼児の活動⑦保育者の指導配慮・留意点⑦時刻⑦評価・反省である。今回の授業で保育指導計画を立案するときに、学生が苦心している部分は「⑦予想される幼児の活動」であった。実際指導案を書かせたときにはほぼ空欄で提出する学生が多く、まずは理解できていない部分と考えられる。一方具体イメージが無いと難しいとされる⑦幼児の生活(の流れと保育者の願い)⑦ねらい⑦内容の欄は、比較的書いていた。しかし、その詳細は相互性がなく、実習園で混乱する要素となっていた。これらのこと、この科目において学生の自信の無さとつながる要因の一つである。

②立案⇒教材作成⇒模擬保育・発表⇒評価・反省 の一連を体験して初めて、自分の計画に難があることを発見する学生が多い。保育シミュレーションを事前・事後学修として行っていないことが考えられる。

A[改善策](学修評価アンケート結果/表1を参照)

①言葉の獲得の概論は、問題なく習得できていると考える。しかしながら、専門用語の習得では評価が下がり、小テストを実施することで意識が改善すると思われる。

(今回は実習日程の加減で実施できなかった。実習期間が全員一緒であれば可能)

②スライド表示のレジメやDVD視聴による講義や解説は理解しやすさの評価が減少している。資料にスライド全てを掲載せず、加筆や考察を問う部分が含まれていたからと考える。学生が資料に頼りすぎないよう教科書との併用の指示を増やすことで改善できる。

③指導案立案のコツは理解が進んでいる。他者の発表や資料、教材という見える学びの成果を出し、活用させる取り組みが重要である。一方低評価である学生は幼保を目指さず単位目的の履修生で満足度が低く履修指導が一層必要であると考える。

④教材作成では色覚に関する指導やチャイルド・ビジョンの体験を反映することができた。但し個人的に指導が必要なので、完全に自宅で作成させるのではなく大学で指導を加えながら視聴覚教材を作成した方がよいとわかった。

(表1)学修評価アンケート

中間評価 2021.11.15 N=23 回収率 95.8、最終評価 2022.1.24 N=17、回収率
70.8%（最終評価の回収率減少は covid-19 陽性者・濃厚接触者判定による特例欠席による）

項目	そう思う		思う		余り思わない		思わない	
	中間	最終	中間	最終	中間	最終	中間	最終
①授業を通して 乳幼児の言葉の発達のイメージが具体的に把握できた	39.1	↑52.9	60.9	↑47.1	0	0	0	0
②スライド表示のレジメやDV D視聴による講義や解説は理解しやすかった	65.2	↑58.8	34.8	↑41.2	0	0	0	0
③豊かな言葉をはぐくむ歌や手遊びなどの習得に意欲的になった	47.8	↑52.9	47.8	↑35.3	4.4	↑11.8	0	0
④主体的に授業外でテキストを見直したり専門用語を理解したりした	21.7	↑29.3	56.6	↑58.9	21.7	↑11.8	0	0
⑤絵本やお話教材作成に関心をもち、主体的に実習に向けて準備を進めた	43.5	↑58.9	52.2	↑23.5	14.3	↑17.6	0	0
⑥指導案作成のコツの資料を参考に部分指導案を納得して書くことができるようになった。	34.8	↑47.0	56.5	↑47.0	8.7	↑6.0	0	0
⑦友人が作成した教材や保育指導案に興味をもち参考資料としている	60.9	↑88.2	34.8	↑11.8	4.3	↑0	0	0
⑧チャイルド・ビジョン体験で乳幼児の視界を理解し保育で配慮することができた	65.2	---	34.8	---	0	0	0	0
⑨模擬保育を通して、読み聞かせに関する指導法や保育者としての配慮が理解できた	---	58.8	---	41.2	---	0	---	0

自由記述

- ・【13件/76.5%】他の人の発表から、発想や工夫・仕掛けや色々な題材を知るきっかけになった。工夫や参考にしていきたいことが多く見つかったので、今後いかしたい。
- ・【2件/11.7%】マグネットシアターを作ってみて何歳児対象なのかを考えて作る難しさを改めて感じた。
- ・【3件/17.6%】視覚に困難のある子どもへの配慮など、どのような子どもが見ても視覚的に楽しめる工夫をすることは、保育者の援助や配慮につながると知った。
- ・他の人の発表を見てストーリーだけではなくクイズにするなど違った楽しみ方を知ることができた。
- ・次に使う時に発展できる方法を考えておいた方がよいと思った。
- ・実習園の先生と自分の保育しか見ることができなかつたが模擬保育をしてよかったです。他の人の保育を見て気を付けようと思ったことが多くあった。
- ・自分で教材を作ることの難しさを感じた。
- ・色々な教材を見られ、自分に足りないものや思い付かなかつたことを知ることができ良い経験になった。
- ・作ることは大変だったが、納得のできる教材ができ満足している。
- ・マグネットシアターなどの教材を使うことで子どもの感性が豊かになることがわかった。

4. A【学科の改善策】

2022 年度は、コアカリキュラム実施に向かう、準備の年になる。そのことを踏まえ、次のような取り組みを行っていきたい。

- ①コアカリキュラムを理解し、指導計画の立案、模擬保育の実践、反省と改善を徹底し、実践力を高める。
- ②教材・資料の内容や提示方法について、過不足がないよう点検を重ねる。
- ③IT機器の積極的な活用に努める。
- ④科目間の連携を強化する。